

# あなたと、わたしの歪な歳時記

大木茂実

登場人物

## 【相羽家】

長女…相羽 光 (29歳)

長男…相羽 蓮司 (25歳)

次女…相羽 晶 (23歳)

母…相羽 令子 (48歳)

叔母…音北 歩美 (46歳)

## 【光の職場】

同僚…松下 ほたる (28歳)

先輩…早川 龍子 (38歳)

## 【光の友人】

女友達…吾妻 芝乃 (29歳)

この物語は、どこにでもいそうな女性会社員、相羽光のなんでもない日常を描いたもので、それは、あなたから見れば一年を通してなんでもない、取るに足らない日常なのである。

あまりのなんでもなさには、十二カ月、どこから始まって、どの月から見ても同じ物語。

でも、なんでもない日常でも見る角度やタイミングによってその見え方というものは変わったりするのかもしれない。起こった出来事は変わらなくても、何かが変わることもあるかも。でも、何も変わらないのかも。

と、いうことでこの物語は相羽光の十二カ月を、どの月から見始めるのか。それは、物語が行われる劇場。その公演当日、上演されるまさにその時に、くじびきでもなんでもいい、観客によって決められるものである。

戯曲はとりあえず、一月から始めてみる。

## I. 一月

相羽家のリビング。リビングというか居間。

「居間」という響きがピツタリな部屋。4人だと少し大きい6人だと少しキツめのこたつに光と妹の晶。母の令子が身体を縮こまらせて入っている。その奥には古い茶箆筥が。3人が見ている少し小振りな32インチのテレビからはNHKの『ゆく年くる年』の音が。やがて除夜の鐘の音色も聞こえてくる。と、3人顔を合わせて少しバラバラに新年の挨拶をする。

晶      あけましておめでとうございます。

令子    はい、おめでとー。

光      あけましておめでとうございます。（立ち上がり）じゃあおそばの用意するね。

令子    （TVのチャンネルを変えながら）よろしくー。

光、茶箆筥の横にある引き戸を開くと薄暗いキッチンが見える。キッチンというか台所。光はその台所へ入っていくと年越し蕎麦の調理を始める。

令子 (TVを見ながら) すぐできるー？

光 うん？

令子 そば。

光 途中まで用意してたから。

令子 そー、用意のいいことで。

光 ・・・今年はおおづつやの茹でてるおそばにしたの。安いし、湯通ししたらすぐ食べられるから。  
令子 ー？

光 いつもの乾麺のおそばの方がおいしいと思うけど、あんまり変わらないかなと思って――  
(ちゃんと聞いてない) ふーん。

光 ――― だったらすぐ茹でられる方のおそばがいいと思って。安いし。おそばのつゆはいつものと同じだし、あんまりかわんないかな  
令子 と思って。

晶 そうなんだ。

光 うん。

晶 れんにい呼んで来る？

光 ー？

晶 れんにい、もう呼んでくる？

令子 まだいいでしょ。

晶 そう？

光 おそばが出来てからでいいんじゃない？

令子 (ほぼ同時に) そば、出来てからでいいでしょ。

晶 うん。

晶、どちらに答えたかわからないが、返事をしてまたこたつに入る。

令子 (電子番組表を見ながら) どこも面白いのやってない。

晶 ジャニーズのやつは。

令子 ジャニーズ? ないよ。

晶 え?

令子 ジャニーズないじゃん。

晶 あ、なかった。ハハ、今、あのアイドル枠だれなんだろう。

令子 (チャンネルを替えて) あーこれこれ・・・わー、誰もわかんねー。  
晶 ねー。

令子 あんたわかんないの。若いのに。

晶 興味ございませんので。

令子 左様で。

晶 ええ。

と、光が出来上がった蕎麦をお盆に乗せて入ってくる。

光 B E F I R S T でしょ。

令子 え? あ、え? もう蕎麦出来たの。

光 すぐ出来るっていったでしょ。

令子 そうだっけ。

晶 あ、じゃあれんにい呼んで来るね。

光 うん。

晶 (立ち上がって) れんにいー、お蕎麦出来たよー。  
令子 にしても早いね。

光 おおづつやの、茹でてるおそばにしたから。

令子 え、いつものじゃないの。

光 うん。

令子 えー、年越し蕎麦はいつものやつにしてって言ったでしょ？

光 え、そうだった。

令子 いつも言ってるでしょ、蕎麦はあの、あれ、乾麺のにしてって。

光 え？ああ、前は言ってたけど今年は――

令子 知らないわよ今年言ったかどうかとか。

光 え？

令子 前言ったの覚えてるんなら、わざわざこれ買わなくていいでしょ。

光 でも、こっちの方が早いし。あと、味もあんま変わらないかなって。

令子 変わるわよー。一回茹でてるのもっかい茹でたら、何かのびてる感じするでしょ。

光 え、するかな？

令子 するわよーもー、どうせなら美味しく年越ししたいのに。

光 でも、これも美味しいと思うよ。

令子 美味しいわけないでしょ。全く、お父さんに似て味オンチなんだから。

光 ・ ・ ・

と、そこに晶が一人で戻ってくる。

晶 れんにお蕎麦、後でいいって。

光 そう。

晶 動画がいいとこなんだって。後で見たらいいのに。

令子 ほっときやいいでしょ。いただきます。  
晶 (座りつつ) いただきます。

二人、麺をすすり出す

光 ……いただきます。

晶 (麺をすすり終え) ん？これ、変えた？お蕎麦。  
光 ん？うん。

令子 美味しくないでしょ？

晶 (もう一度すすり) ……んー、ううん。美味しいよ。これはこれで。

令子 そう？

晶 うん。(麺をすする)

令子 そ。

令子も何事もなかったように平然と麺をすすり出す。光も無言で麺をすする。しばらくすすり音だけが響く中、光がTVに目を向ける

光 これ、B E :: F I R S T。

晶 ん？

光 B E :: F I R S T。——これは、T r a v i s J a p a n。

晶 よく知ってるね。

光 うん。

令子 若くもないのにね。

晶 ひかねえ若いでしょ。

令子 そう？（光に）そうなの？

光 ん、どうだろ。

晶 少なくともお母さんより若いよ。

令子 （笑いながら）そりやそうだ。あんた達の方が若かったら大変だ。

晶 大変とかじゃなくて、そもそも生まれようがないからね。

令子 だからでしょ。あんた達より若い私が、私より年取ったあんた達を生む・・・おおごとでしょ。

晶 概念的な話？

令子 そー、がいねんがいねん。

晶 そりや大変だ。（光に）ねえ？

光 え？うん。（少し笑って）うん？んー、概念？

晶 概念。

光 ん？フフ、そうね。

令子 わからなきゃ笑わなくていいのよ。

晶 また、そういう言い方して。

令子 そういう言い方もこういう言い方もどういいう言い方もしますよ。

晶 はいはい。

光 ・ ・ ・

またしばらく麺のすする音だけが響いている。やがて令子が食べ終えようとする。

令子 ごちそうさ――

光 これはSnowMan!!

令子 ―――え？

晶 なに？

光 ……これは……すのうまん。

令子 ……なに肉まんみたいな言い方してんの。知ってるわよ、SnowManくらい。

光 ……そう。

晶 バラエティとかよく出るしね。

令子 はい、ごちそうさま。

令子、立ち上がり食器を片付けだす。と、そこに弟の蓮司が現れる。蓮司、ワイヤレスイヤホンを付けスマホで動画を見ながら座卓の所定の場所へと座る。

晶 ごちそうさまでした。(蓮司に) 動画見終わった？

蓮司 (スマホを見ながら) ううん、まだ。腹減ったから、食べながら見る。(見ながら蕎麦を食べだす)

晶 見るか食べるかどっちかにしたら。

蓮司 どっちにもする。

晶 そ。

と、食器を洗い終えた令子が戻ってくる。令子、TVを見ながら蓮司に声をかける。

令子 —— (座りながら) あけおめ。

光 あ、あけましておめでと。

晶 (蓮司の肩を叩いて) あけましておめでとって。

蓮司 あけおめ、ことよろ。



蓮司、適当にあいさつをしつつ蕎麦を食べながら動画を見ている。

晶  
（指さして）マルチタスク。  
光  
ごちそうさま。

光、立ち上がり食器を片そうとする。

晶  
あ、私、片付けるからひかねえ休んでて。  
光  
ん、ありがと。  
晶  
いえイエー！

晶、元気よく返事をしながら食器を持って台所へと行く。しばらく無言が続き、台所から食器を洗う音が。居間では蓮司の蕎麦をすする音と動画を見てからの笑い声だけが聞こえている。光は時折、晶の方を気にしてチラチラ見ている。やがて、晶が食器を洗い終え居間に戻って来ようとするが、ピタと足を止めて半身で台所に振り返る。

光  
・・・どうしたの？

晶  
・・・  
光  
晶？

歩美ちゃんからもらった洋菓子ってまだ残ってたっけ？

光  
え、ああ、どうだろ。

令子  
（TVを見ながら）歩美からもらったやつなら半分くらい残ってたわよ。誰も食べてなければ。  
晶  
そう。

光  
私、食べてない。

晶　　れんにいは？

蓮司、動画を見つつ蕎麦をすすりながら首を横に振る。

晶　　おっけい。じゃ、いただきます。

晶、台所へと戻る。

光　　（晶に）まだ食べるの？

晶　　うん。ひかねえは？

光　　私は、おなかいっぱい。

晶　　（箱ごと持って来つつ）そ。お母さんは？

令子　　（光と自身を指さし）同じく。

晶　　そ、じゃ、私だけいただきます。

令子　　残しといてよ。

晶　　まだ、マドレーヌもパウンドケーキも残ってるから。

光　　——ああ！！

光、急に物凄い大声を上げる。晶と令子、蓮司も何事かといやホンを外して光を見る。

晶　　び・・・びっくりしたあ。

令子　　なんなの急に。

蓮司　　ねえちゃん？

光 （箱を見て）これって、歩美さんとの、お父さんの香典返しだね。

晶 え、うん。クリスマスケーキと一緒にもらった。香典返しとクリスマス。

光 ——— 喪中。

晶 え？

令子 ん？

蓮司 あー、あけおめ？

令子 え？

光 それ！喪中なのに言っちゃった。

4人、一瞬、無言になる。

晶 それだけ？

光 え？

令子 大げさね。よそで言うんじゃなしに。家の中だからいいでしょ。

光 でも喪中——

令子 気にし過ぎ。

光 . . .

蓮司、無言で動画と蕎麦に戻る。晶は洋菓子里に、令子もテレビへと戻っていく。光、しばし皆をチラチラ見つつ、やがて座卓の上に目をやる。やがて目に映るフィナンシェに手を伸ばし、それを一つ取るとムシヤムシヤと食べだす。晶、光の様子が一瞬気になるも、興味を洋菓子里に移して二つ目のお菓子を食べだす。

光 （誰にも聞こえない声）．．．ムシヤムシヤする。むしゃむしゃむしゃむしゃ．．．

光、ぶつぶつ言いながらフィナンシェを食べだすと、相羽家の居間だった空間が、いつの間にか白が基調の明るいカフェへと移り変わる。

## 2. 二月

光が食べていたフィナンシェはオシャレな形をしたケーキへと変貌し、表情変わらずムシャムシャと食べている。光の正面に幼馴染の吾妻芝乃が座っており、その様子を面白そうに見ている。

芝乃 美味しい？

光 うん。

芝乃 そう。

光 美味しい。このケーキ。

光、残り少なくなっていたケーキを口に放り込むと、コーヒーでそれを流し込む。芝乃、その様子を微笑ましく見ながら紅茶を飲む。

芝乃 思ってたよりいいね。朝からスイーツ。

光 うん、いいよね。

芝乃 昼からお酒、みたいな。

光 わかる。

芝乃 私、甘いのが好きだったし。

光 え、そうなんだ。なんで？

芝乃 ちよっとね、ダイエットしてて。

光 そうなんだ。

芝乃 正月にお餅食べすぎちゃって。もー、なんであんな美味しいのかな。お餅。

光 ねー。

芝乃 光は何が好き？

光 お餅？

芝乃 私はあべかわが好き。きな粉たっぷりかけて、あとね、黒ゴマを擦ったのを混ぜるの。もー、止まらないの。あんなのどんだけ入っちゃうもん。

光 美味しそうだね。

芝乃 で、光は？

光 ん、あー砂糖醤油、かな。

芝乃 あー！わかるー！

芝乃、興奮のあまり悶えている。

芝乃 シンプルだけど、美味しいよね。

光 うん。

芝乃 海苔で巻いても美味しいよね。

光 ん、のり？

芝乃 うん。巻かない？

光 ん、あー、そうね。あつたら巻くかな。

芝乃 そう。

光 あお中元とかで貰った、海苔？あつたら巻いて食べるかな。

芝乃 御中元で？

光 うん。

芝乃 そう・・・あ、御歳暮？

光 え？

芝乃 御中元じゃなくて。

光 あ、そうだ。ハハ。お中元だったら夏だもんね。

芝乃 そだよ。

光 そだね。

芝乃 笑い、釣られるように光も笑う。芝乃、紅茶を一口飲むと光、それにも釣られたようにコーヒーを一口飲む。

芝乃 (ティーカップを持ったまま) はー、にしてもいいお店だね。明るくて、なんかキラキラしてて。

光 うん、そうだね。

芝乃 お茶もケーキも美味しいし・・・あ、そだ。チョコ、用意しなきゃ。

光 チョコ？

芝乃 うん、バレンタイン。あー、面倒くさいなあ。

光 そうなの？

芝乃 慣例化してくると義務感が生じてくるので。

光 ぎむかん。

芝乃 ー、どこで買おうかなあ。

光 作らないの？

芝乃 買うよ。え、作るの？

光 うん、作る。

芝乃 作るんだ。

光 作る。買うの？

芝乃 うん、買う。

光 そうなんだ。

芝乃 そうなんです。

芝乃、もう一口紅茶を飲むとソーサーにカップを置き、ケーキを食べながらまた口を開く。

芝乃 (フォークに刺さったケーキを見て)・・・やっぱり甘いものは作ったりあげたりするんじゃなくて、食べるものよねえ。

光 うん？うん、そうだね。

芝乃 でも、光は作るんでしょう？今年も通君に。

光 うん、あと家族にも。あと、職場の人にも。

芝乃 はー、偉いねえ。

光 そんなことないよ。その、かんれいか、してるってだけ。

芝乃 慣例化か。

光 そう、かんれいか。

芝乃 義務感って気もするけどな。

光 え？

芝乃 職場の人にあげるのって、前時代的って感じもするんだよね。

光 え？

芝乃 あ、光のこと否定してるんじゃないよ。うちの会社、バレンタインの義理チョコ、禁止になったの。

光 え、そうなの？

芝乃 っていうのも社内規定で決まったとか、そんな大げさなものじゃなくて、女性社員たちで止めようって決まったの。

光 そうなんだ。

芝乃 毎回チョコ選ぶ手間だとか——お金だっとかかるし。それに、うちの男たちって誰もホワイトデーにお返しして来ないの。

光 そうなんだ。

芝乃 信じられないでしょ？で、女性社員が集まって、「今年どうする？」「毎年嫌だよね」って話したら、「令和なのに前時代的じゃない？」「そもそもハラスメントじゃない？」「チョコハラだー！」って声が上がって。で、うちのお局が、男性社員一人ひとりに「今年からは義理チョコ止めますんで」って言って回ったの。

光 ヘー、お強い。

芝乃 嫌われてるお局なんだけど、それ以来見直されたよね。仕事でミスして嫌味言われても、前よりストレス溜まらなくなったし。

光 良かったね。

芝乃 お局がね。

光 え？

芝乃 お局が良かっただよ。見直されて。

光 そうだね。

芝乃 ね。んで、チョコ。

光 うん。

芝乃 あ、チョコじゃない、バレンタイン。

光 うん。

芝乃 だから、バレンタインを、職場の人に持っていくの止めたら？

光 ・・・うん。でも、通君と家族に作るついでだから。

芝乃 しかも手作りなら、材料費も時間もかかるでしょ？

光 それは、まあ、そう。

芝乃 強制されてるんじゃないでしょ。

光 うん。でも私の課って、同僚と先輩だけで、どちらとも女子だから。

芝乃 あ、そうだっけ。

光 うん。女子社員だけ。



芝乃 そっか。じゃあいいか。

光 うん。

芝乃 ううん良くない。

光 え。

芝乃 別にこれは男性女性の話じゃなくて、バレンタインみたいな文化が、その、作られた文化が、そのどっかの企業が営利目的で作ったイベントに左右されてるのが、それを会社とかの職場で、無意識的に義務になって行われてるのが良くないってことなのよ。わかる？

光 うん、わかる。

芝乃 わかるよね。

光 わかる。

芝乃 ね。

光 じゃあ、今年から持つて行くの止める。

芝乃 それがいいよ。

光 そうだね。そうする。

芝乃 あ、あと女性社員の方がいいと思う。

光 え？

芝乃 さっき、女子社員って言ってたけど、女性社員の方が、ね。ほら、女子アナとか。なんかその、アイコン化されてる言い方って良くないかって。女性、男性って言い方する方が良くないんじゃないかな。

光 そうか。そうだね。

芝乃 ううん、ごめんね。

光 え。

芝乃 なんかダメ出しばかりして。

光 ううん、ありがと。

芝乃 え。

光 その、ちゃんと指摘してくれて。

芝乃 フフ、光のその、素直なところ、好き。

光 ……

芝乃 子供の頃から、なんか、こう押し問答じゃないけど、さっきみたいな時、素直に私の話聞いてくれるから、なんていうか、本当、光と居ると嬉しい。安心する。

光 ……そう。

光、嬉しさを隠すようにコーヒーを飲む。芝乃も合わせるように紅茶を飲みだし、二人とも飲み終える。

芝乃 本当、いいお店ね。

光 そうね。

芝乃 (残ったケーキを見て) あ、やだ、まだケーキ残ってた。

光 本当だ。

芝乃 うーん、どうしよう。

光 私、食べようか。

芝乃 え、いいの？

光 私、まだ入るし。

芝乃 ごめんね、残したら悪いし。

光 ううん。行儀悪いけど。

芝乃 行儀悪い。

2人笑う。光、芝乃の残したケーキを頬張る。

光 (芝乃に聞こえない声) ムシャムシャする。むしゃむしゃむしゃむしゃ・・・

光、嬉しそうにケーキを食べ、空になったであろうコーヒーでプハーツと流し込む。と、カフェだった空間が光の職場へと移り変わっている。

### 3. 三月

光の職場。光がプハーツと大きな声を出すと、間仕切りのある隣のデスクで仕事をしていた光の同僚の松下ほたるがギョツとして、立ち上がり、光を覗き込む。

松下 ……どうしたの？

光 あ、ごめんうるさかった？

松下 うん。

光 ごめんね。今日中に終わらせなかった仕事はどうにか片付いたから。

松下 息でも止めてたの？

光 え、ああ、そうかも。

松下 アラサー〇〇無呼吸症候群で勤務中に死亡。

光 ちよつと、勝手に殺さないでよ。

松下 あなたが勝手に死ぬんでしょ。

光 え。ハハ、そうか。

松下 プハーツ。ビールでも飲んでんのかと思ったわよ。

光 いいね。終わったら飲み行く？

松下 何それ珍しい。

光 今日も残業覚悟だったんだけど、時間内に終わったから。

松下 そら良かった。ん、本当に行く？

光 え、本当に？行っちゃう？

松下 よし、じゃあ私もあと精算書作るだけだから、ちょっと待ってて。

光 了解。あ、じゃあお茶入れてくる。

松下 いいの？悪いね。

光 いえイエー！

光、松下から空の湯飲みを受け取り自身の空のカップを手にし、元氣よく部屋を出て行こうとすると、入れ違いで書類を持った先輩の早川龍子が入ってくる。

光 おつかれさまです！

早川 おつかれさま。

早川、光の様子に気を取られつつ、松下の隣の自身のデスクへ行く。

早川 ご機嫌ね。

松下 (タイプしながら) 仕事、早く終わったそうです。

早川 そう。

松下 で、仕事終わったら飲み行くことになりました。

早川 え、そう。

松下 珍しいですよね。

早川 （書類を捲りながら）すつごく。

松下 あ、早川さんも行きます。

早川 え、私も？

松下 どうです？

早川 どうしよう。ちょっと考える。

松下 そうですか。

しばらく早川の書類を捲る音と松下の打つタイプの音だけが聞こえる。

松下 （タイプを止め）——あ。

早川 どした？

松下 今日レイトショウ観に行く日だったなと思って。しまったな。

早川 あらら。

松下 んー、すみません仕事中にスマホ使います。

早川 どうぞどうぞ。

松下、スマホで映画の上映スケジュールと自身の予定とを見合わせる。早川、書類を読み終え、タイプし出す。

松下 あ、大丈夫そうです。来週末までやってるんで。

早川 そう。

松下 はい。

しばし二人のタイプ音だけが聞こえる。

早川 誰かと観に行くとかじゃなかった？

松下 相手がいけませんので。

早川 それは失礼しました。

松下 ハラスメントですね。

早川 怖・・・この場合、何ハラ。

松下 さあ？いずれにせよ、令和なので、気を、つけ、ないと——はい、出来た。

松下、 リズミカルにキーボードを打ち終える。

早川 おつかれさま。

松下 ありがとうございます——あ、お茶。

早川 え。

と、そこにお茶を淹れた光が入って来る。

光 お待たせしましたー。

松下 あ。

光 え。

松下 ごめん、仕事終わっちゃった。

光 あ、そうなの。

松下 ——でも淹れてくるのも時間かかりすぎじゃない。

光 (湯飲みを渡しながら) お茶っぱの置き場所が変わったの。

松下 ……第一だな。

光 あ。

早川 多分そうね。

松下 全くあそこは——あ、5時来ちゃった。

松下の声に釣られて光と早川も時計を見る。

松下 これ飲み終わるまで待ってて。

光 (笑顔で) 急いでね。

松下 こいつ。(言いながらお茶を啜る)

光 あ、早川さんも飲みに行きませんか？今から松下さんと行くんですけど。

早川 そうなんだ。

光 どうします？

早川 んー・・・それじゃ、私もお邪魔しようかな。

光 はい！ぜひ。

松下 (飲む)・・・行きましょう・・・

松下、お茶を飲む。ピッチを上げる。

早川 お店、どこ行くの。

光 え・・・どこ行きましょう。

早川 決めてないの？

光 駅前行ったら、適当にあるかなーって。

松下 なんだそれ。(飲む)

光 （スマホを開いて）今から予約って出来ますかね。

早川 私がよく行くイワサキってお店なら大体空いてるから、そこでもいい？

光 はい。

早川 松下さんも？

松下 ……（飲み終えて）はい、そこで。

早川 はい。じゃ、急いで終わらせるからちよっと、待っててねー。

早川、タイプを打つスピードを上げる。松下、「ごちそうさま」と光に礼を言いつつ湯飲みを片しに行く。光、目線で松下を見送りつつ早川も見えて、満足そうに席に着き、帰り支度を始める。

早川 そういえば、ありがとうね。

光 え、何がです？

早川 急に頼んだ見積り。大変だったでしょう。

光 いえ、前に早川さんからいただいたフォーマット使ったら直ぐできましたので。

早川 そ、良かった。

光 なので、ありがとうございます。

早川 え。

光 こちらこそ、ありがとう、です。

早川 フフ、何それ。

光 へへ。

光、満足そうに笑う。



早川 でも、自分の仕事と並行して大変だったでしょう。

光 いえ、あ、でも、大丈夫です——でした。

早川 そう——はい、終わり。

光 お疲れ様です。

松下 (戻ってきて) お疲れ様です。じゃ、行きますか。

早川 (PCをシャットダウンしつつ) そうね。あ、その前に相羽さん、見積書だけ見せてもらっていい？

光 え、あ、はい。

早川 あ、もうPC落としちゃった？

光 あ、いえ。大丈夫です。

早川 そう。じゃ、お願い。

早川と松下、帰り支度を始める。光、席を立って早川がPCを見られるように席から少し身を除けて待つ。先に支度を終えた早川が光のデスクに向かう。

光 (マウスを操作し) え、と・・・こんな感じです。

早川 うん・・・うんうん。

早川、自身でもマウスを操作して見積書をチェックする。

早川 あ、ここ、金額間違ってるね。

光 え、本当ですか。

早川 うん。このこと——あと、ここ。消費税入ったまま入力してる。

光 え。

早川 ま、大丈夫でしょ。明日の午後までに先方に送ったらいいし。この程度ならすぐ直せるから。

光 そうですか。

早川 うん。それより、ビールの口になってるから、早く行こ。

松下 ですね。

早川 ね。

光 あ、はい。

早川 うん。

松下 じゃ、シャットダウンしま——ん？

松下、PCをシャットダウンしようとする手を止める。

光 え。

早川 どうかした？

松下、無言でマウスを操作している。その動向を恐る恐る見守る光。

松下 ……あ。

光 え。

早川 どうしたの？

松下 （光に）これ、終わって無くない？

光 え？…え？え、あれ、ほんとだ、え、なんで？

光、明らかにやってないことを思い出した顔をしつつ、間仕切りに隠れカチャカチャとやってる風にカチャカチャと操作し出す。

早川 あらら——（松下に）なんでわかったの。

松下 相羽さん、終わった仕事もデスクトップに残したままなの、前に注意されましたよね。それからフォルダ仕分けして入れるようになるほど。

早川 えー、保存出来てなかったんだ。なんで？

光 ごめん、ちょっと代わるね。

光 え、あ、はい。

早川、 光と代わってマウスを操作しだす。

早川 ・・・・うん・・・うん・・・なるほど・・・（時計を見て）よし、１０分でやっちゃおう。

松下 え？

光 １０分で、ですか。

早川 この位ならサーっとやれちゃうから。データもらうね。

光 ・・・・え、早川さんがですか？

早川 うん—— はい、私のPCにデータ送ったから・・・（自身のデスクに移動しながら）ああ、立ち上げないといけないか。

光 早川さん。

早川 （笑顔で）大丈夫。あ、松下さん、先にイワサキに行って席、取っといってくれない？

松下 え？あ、わかりました。

早川 よろしくね。直ぐ行くから。

松下 はい。それじゃ、お先に失礼します。

早川 （席に着きつつ）はーい、おつかれ様。

光 あ・・・おつかれさま。

松下、部屋を出て行く。

光 あの、早川さん――

早川 相羽さんは、この間に見積書直そうか。

光 え。

早川 時間勿体ないしね。

光 あ、はい。

光、ゆっくりと席に着き、ゆっくりと作業を始める。

早川 よし、起ち上がった。やりますか。

光 ……

しばらく二人のキーボードを叩く音が聞こえる。明らかに打つスピードが違っていき、光、その手を止めて口を開く。

光 ……すいません。

早川 (打ちながら) んー？

光 保存し忘れて。

早川 都度都度、保存した方がいいね。

光 ――はい！以後、そうします。

早川 相羽さん、やるって決めたらちゃんとやる人だもんね。

光 ――はい！あ、いえ、うっかりが多いです。

早川 うっかりはするよ。人間なもの。

光 ……はい。

早川 じゃ、手を動かそ。

光 え——あ、はい。

しばらく二人のタイプ音だけが聞こえる。と、早川、カバンから小分けのチョコを取り出し立ち上がる。

早川 (少し大きい声で) 相羽さん。

光 え、はい。

光、間仕切りから顔を出す。

早川 (チョコを投げて) はい。

光 え、あ、はい……(受け取りチョコを見て) あ。

早川 こないだの、お返し。ホワイトデーにはちよっと早いけど。

光 え、あ……ありがとうございます。

早川 (もう一個のチョコを見せ) これ食べて、ビールまで乗り切ろう。

光 ……はい！

光、集中してPCに向かい、チョコを頬張ると、キーボードを打ち始める。

光 ……(早川に聞こえない声で) ムシャムシャする。むしゃむしゃむしゃむしゃ……

と、光、立ち上がり無言でギターを手にし、ストラップを肩にかけ、振り返るとMCの様なものをし始める。

※空間は職場から謎のライブハウスへと早変わりしている。

光　　・・・どうも。内なる相羽光です。私は歌が苦手だしギターなんて弾けるどころか持ったこともないけど、けど、聞いてください。

私の魂のソング・・・『ムシャムシャする』

♪『ムシャムシャする』

ムシャムシャする　ムシャムシャする

ムシャムシャするな

フィナンシェおしゃ　ケーキをおしゃ

チョコレートおしゃおしゃ

話を聞かれていなくても

ダメ出しばかりされてても

うっかり保存を忘れても

ムシャクシャしても

ムシャクシャしても

ムシャムシャしようぜ

光、歌い終わり、ジャンとギターを一つ鳴らす。

光 お次は春。四月だぜ。センキュー。

すると、空間があつという間にライブハウスから相羽家へと早変わりする。

#### 4. 四月

相羽家。居間で蓮司と晶が話を、というか、ほぼ一方的に蓮司が話をしている。晶はスマホ片手に話を聞いているが、内容はしっかり頭に入っている様子。

晶 542人？

蓮司 そう、「白い死神」って呼ばれてて。しかも狙撃だけでその人数で、近接戦での、サブマシンガンを使用した戦闘でも200人以上殺したんだよ。

晶 へー。

蓮司 なんせ狙撃して殺した数は世界記録になってるんだ。

晶 それは凄い。

蓮司 元々彼は、農民と猟師を兼任していて、で、射撃の腕前が凄くて、中でもキツネ撃ちが得意だったんだ。

晶 キツネ。

蓮司 んで、二十歳の時位に、フィンランドの民兵組織に入って。彼は。で、その、射撃の腕を上げるために、あ、軍隊じゃなくて民兵組織だから、仕事は農民と猟師をやっていて、他の農民たちが昼休みをしている間に、ずっと狙撃練習をくりかえしていたんだよ。

と、そこへ春服を着た光が現れる。

晶　へー、まじめだね。

蓮司　でね。その、努力もさることながら、狙撃をする時の慎重さ、それも凄いんだよ――

光、二人の様子を目の端で見つつ、座卓の所定の場所へ座る。一瞬、二人の会話が止まる。が、それはほんの一瞬で、また蓮司の口が動き出す。

蓮司　――って言うのは。実際、狙撃をする時、その、場所は冬だったから、雪山だったり。ほら、フィンランドだから、ね。うん、雪

が基本積もっている中で狙撃するんだけど、相手も狙撃をしてくるからね。そこで彼は、相手に撃たれないように――どうしたと思う？

晶　・・・えー、なんだろう。

晶、急な質問にスマホそっちのけで思案する。光は面白そうなテレビがやっていなかったのか、スマホをいじっている。

蓮司　雪を食べるんだ。

晶　え、雪を。

蓮司　雪山で、寒いから、その、狙撃者も息をするから、その吐く息。その白い息が――なるほど。

晶　え？

蓮司　その、しもへいへいさん？

晶　シモヘイへ。

蓮司　あ、へいへさんね。しも、へいへさん。で、そのへいへさんが、狙撃をする時に、雪を食べることで、吐く息が白くならない――ってこと？

蓮司　そう！そうなんだよ！凄いよね！



晶 うん。お腹壊しそう。

蓮司 相手に自身の居場所は今さらさらずに、一方的に狙撃をする。それも彼はスコープを全く使わないんだ。スコープのレンズでそれ自体が光を反射するからね。で、スコープいらずで狙撃を成功させていたんだ。いやー凄かったね。

光、スマホから目をそらして音のする溜息をつこうとするその一歩手前で部屋に令子が入ってくる。

令子 あんた見てたの？

蓮司 え。

令子 (座りつつリモコンでチャンネルを替えながら) 何で見てもないものを見てきたように話してんの。

晶 そういう話し方なんでしょ。

令子 その話し方がお父さんみたいなの。

晶 そ。(意に介さず蓮司に) で？

蓮司 え？

晶 しもへいへさんの話。

蓮司 え・・・うん・・・え・・・

蓮司、話を戻そうとするがどこまで話したか思い出せず、まごまごしている。晶は真っ直ぐ蓮司を見て、令子は全く気にせずテレビを見ており、バラエティ番組でも見ているのか時折笑ったりしている。光はまたスマホを操作し始めているが、この空気にいたたまれなさそうな、それでいて嬉しそうに笑みを浮かべている。

蓮司 うん・・・え・・・うん・・・

晶 うん。

蓮司、ぶつぶつ言いながら立ち上がり、部屋を出ていく。

晶 あれ、れんにい？

蓮司 (去りながら) 今度・・・

蓮司、部屋から出ていく。

晶 こんど。(光に) 今度って？

光 え、さあ。

令子 また話すってことでしょ。

晶 そうなの。

令子 また聞いたら。私たちいない時に。

晶 私たち？

令子 (光を見て) ね。

光 え、フフ、え？――

令子 (光を無視して) また今度聞きなよ。

晶 こっちから？いいや。

令子 いいの？

晶 うん。どうせまたれんに話してくると思うから、そんな時に聞くぞ。

晶 うん。

歩美 (遠くから) ごめんくさいい。

晶 ―― あ、歩美ちゃんだ。(立ち上がり) はい、どーぞー。

晶、玄関に向かい、叔母の音北歩美との「いらっしやい」「邪魔します」などの会話が聞こえてくる。特に興味を示さない光と令子。と、そこに晶と歩美が入ってくる。歩美は両手に風呂敷包みを持っている。

歩美 おじゃまします。 (令子に) もー、令子ちゃんなんで来なかったのお？

令子 (テレビを見たまま) んー、なんだっけ。

歩美 なんだっけって——お花見よお。

光・晶 (同時に) え？

歩美 みんなで来てっていったでしょお。

令子 えー、そうだったっけ。

歩美 言っただじゃないの。先週も、一昨日も、昨日も。

令子 あー、あれ今日か。忘れてた。

歩美 もー、ほんとこの子は。

令子 ごめんねー。

令子、この間、一切歩美を見ていないが、歩美はそこは全く気にせずに花見に来なかった話にだけ気が向いている。

晶 (歩美に) お花見？

歩美 そおよお——こんにちは光ちゃん。

光 あ、こんにちは。

晶 ——で、お花見って？

歩美 あ、そうお花見にね、今日みんな来てって令子ちゃんに伝えてたのに、みんな知らなかったみたいなのよお。

晶 みたいだね。

歩美 そうなの。

晶　でも、そりやそうだよ。お母さんにしか言っていないでしょ。

歩美　うん。

晶　歩美ちゃん。そういう大事なことはお母さんじゃない人に伝えなよ。

歩美　え？

晶　いつもは大体私かひかねえに伝えるでしょ？

歩美　そうねえ。

晶　なんで？

歩美　それは、令子ちゃんに言っても忘れちゃうから。

晶　でしょ。なのになんで今回はお母さんに伝えたの？

歩美　それは——だってお花見なら行きたいだろうから、ちゃんとみんなに——

晶　甘い。

歩美　え？

晶　あー、行きたかったなあ、お花見。

歩美　ねー、私も来てほしかったあ。ねえ、光ちゃん。

光　え、うん。

令子　行ってらっしゃいな。別に大山公園は逃げないでしょ。

光　え？

令子　（光に）桜が枯れた訳じゃないでしょ。行ってらっしゃいよ。

光　え、うん、え。

光、本当に行くのか。行った方が良いのか迷いチラチラ晶を、あと歩美の顔を見たりする。

晶　（令子に）いや、それを言うならあいりす公園でしょ。

光 え？

晶 お花見、行くのいつもあいりすの方でしょ。

歩美 あ、それは、今年から大山公園で出店が増えて。で、うちのパパが大山に行こうって言って、それで——ん？令子ちゃん大山公園って——覚えてたんじゃない！

令子 (リモコンを操作しながら) だから忘れてたって。

歩美 忘れてないじゃないのよお。(光に) ねえ。

光 え、うん？

歩美 ——あ、でも蓮司君にも伝えたのよ。来てって。お花見に。

光 え。

歩美 そう。令子ちゃんこんだから。来ないかもなあって思って。

令子 (笑って) 来ないって思ってるんじゃない。

晶 そんな事より。(歩美の手荷物を指さし) それ、なあに？

歩美 え、これ？・・・フッフ。

歩美、不敵に笑い、座卓の上に風呂敷包みを置き(令子はテレビを見ながら絶妙にそれを躲す)、結び目をほぐと中から5段重ねのお重が現れる。

歩美 じゃーん！はい。こちら相羽家のみなさま用のお重です。

晶 (ノータイムで蓋を開け回り) お、おーすごい。豪華ばーん。

光 ちよつと晶、みっともない。

晶 (無視して) 歩美ちゃん。いつもありがとうねえ。

歩美 ううん。いいのいいの気にしないで——

晶 うん！

歩美 (聞いておらず) —— こっちがしたくてやってることだから。

晶 —— (光と令子に) ね、美味しそうだね。

光 ん、だね。

晶 あ、(立ち上がり) れんにいも呼んで来よう。

歩美 あ、そうね。私も行く。忘れてた理由も聞きたいし。

令子 (テレビを見て笑い) 別に行かなくていいんじゃない。どうせ来ないし。

歩美 そんなことないでしょう。こんなに美味しそうなんだし。じゃなくて美味しいから。(晶に) ねえ。

晶 ねえ。

令子 (笑って) そういう問題?

歩美 じゃあ行きましょ。

晶 はーい。

晶と歩美、部屋を出ていく。令子、テレビを見て笑っていたが、急に真顔になる。

令子 どーせ来るわけないのにね。チーうし君。

光 ……うん。

令子 歩美もいつになったら気づくのかね。嫌われてんの。

令子、そう言いながらおもむろにお重の中の卵焼きをつまみ食いする。

令子 (もぐもぐしながら) 旨っ。あんたも食べたら。

光 え、あ、(部屋の外をチラと見て) やめとく。

令子 あ、そ。

令子、もう一口卵焼きを食べる。

令子 うん。こりや旨い。

と、晶と歩美の話し声が聞こえてくる。令子、凄まじいスピードで咀嚼を終え何事もなかったようにテレビに向く。と、二人が部屋に入ってくる。

歩美 もー、蓮司君部屋から出てこなかったあ。

令子 (飲み込んで)・・・でしょ。

歩美 鍵とか必要なのお？

令子 知らない。あの子が勝手に取り付けたから。

歩美 そうなの？変わってるわね。(光に)——(お重を見て)あ、卵焼き無くなってる——令子ちゃん、美味しかったあ？

令子 食べてませんけど。

歩美 うーそ。(光に)この子、お弁当とかいっつも卵焼きから食べるの。

光 そうなんだ。

晶 ちなみに歩美ちゃん。こっちの風呂敷には何が入ってるのかなあ？

歩美 え、あ——気づいちゃったあ？

晶 気づいちゃったあ。

歩美 フッフ、なんだと思う？

歩美、  
そう言いながら風呂敷包みを開く。

晶  
なんだろ。桜餅、とか。(光に)ねえ、なんだろ。

光 おはぎとか。

令子 お彼岸じゃあるまいし。

光 あ、そか。

歩美 はい、中身はあこれでえす！

風呂敷包みの中から出てきたのは、なんとまあ大きい桜の枝。

晶 ……え？

光 ……これって。

令子 ……あんた。

歩美 素敵でしょ。これがあつたらおうちの中でもお花見、出来るわよお。

令子 流石に引くんだけど。

歩美 あ、折ってきたわけじゃないのよ。なんか、よその子供がよじ登って折れちゃったヤツが落ちてたから。そのまま放っておくのもなんだし、と思つて。

令子 「なんだし」じゃないよ。

歩美 さ、お花見始めましょう。

光 (誰にも聞こえない声で) ……ギシギシする。…ぎしぎしぎしぎし…。

歩美、嬉し気にお重を広げていく。その様子や桜の枝を呆然と見ている3人。と、空間がいつの間にか相羽家の居間から相羽家の、光の部屋へと変わっていく。



5.  
五月

部屋の中では一人、光が座って電話をしている

光  
・・・ぎしぎしぎし・・・あ、え、うん、なんでもない・・・え、聞いてる聞いてる・・・うん！楽しいよ・・・うん・・・  
うん・・・フフ・・・うん、そう・・・え、そうだっけ、ハハ・・・うん、ハハハ・・・うん・・・うん、そう・・・え、そうなんだ、アハハ・・・うん、うんうん・・・へー、そうなんだ・・・へー・・・へー・・・ん？うん——え！うん、そんなことないよ、楽しいよ。うんうん・・・へー！・・・へー！・・・うんうん、アハハ！へえー！！・・・え、うんうん・・・うん、うんうん、アハハ・・・うん・・・あ、え・・・あ、ほんとだ、もうこんな時間・・・あ、そうだね、うん・・・うん、じゃあ・・・あ、あの、え、と、その・・・うん、じゃなくて、来週・・・そう、旅行・・・楽しみだね・・・うん・・・うん？え・・・え、うん・・・仕事・・・え、じゃあゴールデンウィークは——一日？一日だけ・・・そう・・・え、うん、大変なのは通君の方だし、うん・・・え、それは、もちろん、うん・・・じゃあ、憲法記念日に！

光、電話先の彼氏に電話を切られると、フと空間が光の部屋からコーヒーの香りが壁にも染み込んでいる昭和から続いている喫茶店へと切り替わり、光の前には芝乃が座っている。

芝乃  
で、ゴールデン、ウィークの、初日——

光  
(頷きながら) 憲法記念日。

芝乃  
・・・だけ、デートしたんだ。

光  
うん。

芝乃  
そう・・・どこ。

光  
どこ？

芝乃  
うん、どこ、行ったの？

光 あ、デート？  
芝乃 デート。  
光 うん。まず、お昼に食事して・・・  
芝乃 うん。  
光 その後、映画観に行つて・・・  
芝乃 うん。  
光 その後、ここ。  
芝乃 ここ？  
光 うん、ここ。ここのお店。  
芝乃 え、あ、（指さし）ここ？  
光 （指さし）うん、ここ。  
芝乃 そう。  
光 うん。

光、  
そう言うと言の目の前のコーヒを一口飲む。それを見て、  
芝乃も紅茶を一口飲む。光、コーヒカップを置くと口を開く。  
光 （しみじみと）楽しかったよ。  
芝乃 （ティーカップを置き）え。  
光 え？  
芝乃 あ、デート。  
光 うん。  
芝乃 あー、そう。良かった？  
光 うん、良かったよ。楽しかった。

芝乃 そう——それは、良かったね。

光 うん、フフ、良かった。

芝乃 フフ、良かった。

光 フフ。

芝乃 フフフ。

光 フフフフ。

芝乃 フフフ——いや、良くないでしょ。

光 え。

芝乃 いいの？それで。

光 え、うん。うん？え、うん。

芝乃 だって、旅行、行くはずだったんでしょ？ゴールデンウィーク。えっと、6・7と土日だったから、五日間。

光 うん、その予定だった。

芝乃 それが・・・たった一日のデートになったんでしょ。

光 うん。

芝乃 うん、って——いいの、それで？

光 (笑って) だって、しょうがないよ、仕事なんだから。

芝乃 そうだけど・・・そんな割り切れるもんなの。

光 (謎に満足そうに) 仕事だからね。

芝乃 そう。

光、コーヒーをまた飲む。芝乃も紅茶を飲む。光、カップを置き、スマホを手に取り何やら操作しだす。

光 (スマホを芝乃に向けて) ほら、これ。

芝乃 え。

光 ここ。

芝乃 え・・・ああ、ここの。

光 そ、ここの写真。

芝乃 あー、通君。

光 そう、通君。

芝乃 （手を振って）久しぶり。

光 え、そうだった。

芝乃 そうよ。前に会ったの光と付き合う前だもん。

光 そうだった。じゃあ、2年前。

芝乃 ううん。同窓会の時だから3年前。

光 そっか。

芝乃 あ、隣の席か。

光 うん、そこに座ってたの。

芝乃 ふーん、で。

光 え。で？

芝乃 で、なにこれ。

光 え、だから、ここでデート、じゃなくてデートでここに来てたの。楽しかったの。楽しかった写真。

芝乃 楽しかった「時の」ね。

光 うん。

芝乃 まあ、じゃあ、いいか。

光 うん、いいの。

芝乃 でも、旅行先の、宿泊先の、キャンセル料とかは大丈夫だったの？

光　——うん。それなりに、かな。それなりに、かかった。  
 芝乃　そう・・・え、それって光も払ったの。  
 光　え、うん。  
 芝乃　え。いくら？  
 光　うーん・・・  
 芝乃　もしかして、全部？  
 光　え、うん。  
 芝乃　自分の分？  
 光　え、ううん。  
 芝乃　え？  
 光　え。  
 芝乃　え？・・・通君の分も？  
 光　うん。  
 芝乃　・・・なんて？  
 光　それは、私が予約したから。  
 芝乃　そう。で、なんで？  
 光　え・・・うん、え、なんで？  
 芝乃　なんで、光が全部払うの？  
 光　だって、私が予約したから。  
 芝乃　それは聞いたよ？  
 光　え。  
 芝乃　なんで、通君の都合で旅行がキャンセルになったのに——光の予定もつぶれたのに、なんで、光がお金を、払うの？おかしくな  
 い？

光 だって、私が勝手に予約したから。

芝乃 え？どういうこと？

光 通君、泊るところは旅行先で見つけたらいいじゃないって、言ってたから。でも私は、もしかしたら、宿泊先が見つからないかもって思ってた。で、念のためと思って、予約してたの。

芝乃 そう・・・で？

光 え、だから、私が勝手に不安になって勝手に予約したのに、（なぜか笑いながら）通君にキャンセル料を払わせるなんて出来ないなあって。

芝乃 ……そう・・・光は、それでいいの。

光 うん。

芝乃 そう。

光 デートも楽しかったし。だからいいの。

芝乃 そう。

光、 カップを手に取りコーヒーを飲み干す。芝乃も紅茶を飲みだす。

光 （カップを置き）この間も、これ、飲んだの。二人で、一緒の。

芝乃 そう・・・良かったね。

光 うん。

芝乃 楽しかったんだ。

光 うん。

芝乃 じゃあいいか。

光 うん？うん。

芝乃も紅茶をゆつくりと飲み干しティーカップを置く。

光 芝乃は？

芝乃 え？

光 ゴールデンウィーク、楽しかった？

芝乃 え——ああ、それなりに。

光 北海道だっけ。

芝乃 うん。

光 どうだった？

芝乃 楽しかったよ。

光 どんな風に？

芝乃 ああ——芝桜とか、見てきたかな。

光 しばざくら？

芝乃 うん。富良野のラベンダー畑で有名なところがあるんだけど、知ってる？

光 え、ああ、うん、多分知ってる。

芝乃 で、そこは5月は芝桜が見られるの。きれいだったよ。もう、見渡す限り全部芝桜の、きれいなピンク色で。

光 そうなんだ。

芝乃 そこで食べたラベンダーソフトも美味しかったよ。

光 あ、それはラベンダーなんだ。

芝乃 そうなの。

光 でも、珍しいね。5月に桜って。

芝乃 え。

光 ——あ、そうか、北海道だから桜が咲くのも遅いんだ。

芝乃　――あ、そうなのかな。

光　私も見たいなあ。

芝乃　――光、芝桜は桜じゃないよ。

光　え？

芝乃　芝桜は、ハナツメクサって言って、桜の花に似た花が咲くから、芝桜って言うの。そういう、お花。

光　え、あー、そうなんだ。

芝乃　うん、そう。

光　あー、そっちかあ。

芝乃　――そっち？

光　――じゃあ、楽しかったんだね。北海道。

芝乃　え、うん。楽しかった。

光　良かったね。

芝乃　うん。

光、先程飲み干したはずのカップを手に取り、コーヒーを飲む体でいる。

芝乃　――あ、で（何やら袋を取り出し）・・・これ。お土産。

光　え、うそ。

芝乃　ほんとー。フフ。

光　え、フフ、えー、ありがとう。なにー？

芝乃　つまんないものだけどね。

光　えー、つまんないの？

芝乃　フフ、どうでしょう。



光 えー、なんだろう・・・ちょっと、重いよ。  
芝乃 フフフ。  
光 えー、楽しみ。  
芝乃 おうち帰って開けてね。本当、つまらないものだから。  
光 期待しとく。  
芝乃 フフ、はーい。  
光 彼氏さんとはどうだった。  
芝乃 え——うん、楽しかったよ。  
光 そう。  
芝乃 ・・・・どうでしょう。  
光 え、なに？  
芝乃 まあ、旅行は楽しかったんだけど。北海道は、楽しかったなっていうか・・・  
光 うん。  
芝乃 彼氏の方は、あんまりというか。  
光 ケンカでもしたの？  
芝乃 ううん、そんなことないよ。ないけど——ちょっと違うなって。  
光 あ・・・また？  
芝乃 またとかやめてよ。  
光 また、飽きちゃったの？  
芝乃 そんなこと・・・ありますねえ。  
光 ほらあ、またじゃない。  
芝乃 ねー、なんてだろう。  
光 他人事みたい。

芝乃 アハハ。悪い人じゃないんだけどね。  
 光 一緒に居て楽しくないの？  
 芝乃 楽しいよ。それなりに。  
 光 それなりに。  
 芝乃 それなりになのよねえ。  
 光 なんだろう。何が足りないんだろうね。  
 芝乃 相手？  
 光 うん。前、見た人だよね。  
 芝乃 ああ、おおづつやの前で。  
 光 うん。すごい優しそうだったし。イケメンだったし。  
 芝乃 イケメンが先じゃない、普通。  
 光 あ、そか。イケメンで優しそうだったし。  
 芝乃 ねー、何が足りないんだろうね。  
 光 わかんない？  
 芝乃 ・・・多分、足りないのは私の方なんだろうね。  
 光 え？  
 芝乃 いつも、相手に問題はないの。でも、なんか足りないって思うのは、私の方に、何か問題・・・っていうか、足りないものがあるのかなあって。わかんないけどね。  
 光 ふーん・・・深い話ね。  
 芝乃 何そのまとめ方。  
 光 いや深そうだなあって。  
 芝乃 (笑って) 深そう。  
 光 え？フフ、え、おかしい？

芝乃 ううん、——いいね、光んとは。  
光 え？  
芝乃 もう、3年でしょ。3年も仲良く続けてらして。  
光 そうね。旅行は行けなかったけど。  
芝乃 あ——でも、ケンカとか無いんでしょ？  
光 うん、仲は、良いと思う。  
芝乃 そこまで聞いてない。  
光 えー、フフ、ごめんね。  
芝乃 なんかのろけてる？  
光 えー、そんなことないよ。  
芝乃 そお？  
光 うん。でも、芝乃に問題は、無いんじゃない。  
芝乃 え？  
芝乃 芝乃はさっきああ言ってたけど。でも、芝乃に合う人が、まだ見つからないんじゃないかな。  
光 ……運命の人と出会えてない、みたいなの？  
芝乃 みたいな。  
芝乃 んー、だいたいけど。ん、これいいのかな。  
光 いいのよ。どうせまたすぐ彼氏できるでしょ。  
芝乃 なんか凄い言われ方してない。  
光 してないしてない。だって芝乃モテるもん。だから、大丈夫。  
芝乃 なんだろう。なんかマウントを取られている気がする。  
光 取ってない取ってない。  
芝乃 そう。

光 そうそう。

芝乃 それに、まだ別れるとは言っていないから。

光 あ、そか。

芝乃 彼氏より北海道が楽しかったってだけだから。

光 それも凄い言いようね。

芝乃 そうね。

二人、笑い合う。光、笑いながらカップを手取るが、空なことを思い出す。

光 ねえ、おかわりする？

芝乃 え、あ、うん。いいよ。まだ話したいし。

光 そ、良かった。おかわり何にしようかなあ。

光、卓上のメニューに目を通す。その様子を見つつ窓の外に目を向ける芝乃。やがて芝乃、何かを見つける。

芝乃 (手を振って) 久しぶり。

光 (メニューを見ながら) なに？

芝乃 通君。

光 (芝乃を見て) え？

芝乃 ほら、あれ、通君だよね。

光 え？・・・あ、ほんとだ。

芝乃 やっぱり。

光 あんな所に立って何してんだろ。

芝乃 ……誰かと待ち合わせだったりして。

光 ちょっと止めてよー。

芝乃 マウント取られたからね。これくらいは。

光 もー、取ってないって。

芝乃 ね、こっち、気づくかな。

芝乃、そういうと窓の外に向けて手を振る。

光 ちょっと、何してんの。

芝乃 え、気づくかなーって。

光 (芝乃の手を掴んで) もー、やめてよー。

芝乃 気づいたら、ここで一緒にお茶したらいいじゃん。

光 えー、そんなの恥ずかしい。

芝乃 何が恥ずかしいのよ。

光 もー。

芝乃 ———え？

光、 え？

芝乃、何かに気付いて振っていた手の動きを止める。笑顔の光、芝乃の様子を見て窓の外に視線を移すと表情が変わっていく。

光 え……誰、あの人。

芝乃 え、(光を見て) 知らない人？

光 うん——え？

芝乃 え？——（窓を見て）ええ？

光 ……手、繋いだ。

芝乃 繋いだねえ——ええ！

光 ええ！？

二人、見てはいけないものを見てしまう。光、固くなるが、ハッと我に返り、キョロキョロしたかと思うと座って顔を伏せる。

芝乃 え？（合わせて座り）何してるの？

光 え……わかんない。

芝乃 いいの。

光 ……わかんない。

芝乃 あ。

光 え。

芝乃 行っちゃった。

光 （顔を上げ）え、行っちゃった？

芝乃 行っちゃった。

光、しばらく窓の外を見て、やがて視線を店内に戻す。

芝乃 ……どうする？

光 え。

芝乃 追いかけたり、する？

光 ……注文する。

芝乃 え？

光 注文する。

光、メニューを見る。

光 …… 決めた。芝乃は何にする？

芝乃 え？…… うん、そうね。

芝乃、気もそぞろながらメニューを見る。

光 (誰にも聞こえない声で) ギシギシする。ぎしぎしぎしぎし…

芝乃、注文するものが決まり、店員に声をかける。すると、空間が喫茶店から相羽家の居間へと変わっていく。

6. 六月

相羽家の居間へと歩美のおしゃべりがブリッジとなり切り替わっていく。やがて座卓に晶と歩美が座っている形に。晶は所定の位置に、歩美は令子の位置に座っている。ちなみに奥の棚の上にこれまで無かった木彫りの熊が鎮座している

歩美 ——でね、言ってあげたのよお。「次、止まります」押せてないですよって。だってそのおばあちゃん、降りようと思ってボタン押そうとしてたんだから。でも、ちゃんと押せてなかったみたいでランプ光ってなかったのよね。だから私声かけてあげたのに、そのおばあちゃん、なんて言ったと思う？

晶 んー、なんだろう？

歩美 「余計なお世話様」・・・よけいなお世話さまなんて言うのよお。もお酷いって思わない？

晶 へー、ひどいねえ。

歩美 酷いでしょ？私、開いた口が塞がらなかったわよお。

晶 そうなんだ。

歩美 でね、私言っちゃったの。

晶 ——— 開いた口塞がってないのに？

歩美 え？

晶 口塞がってなかったらしゃべられないよね。

歩美 ん？でもそれだったら塞がった方がしゃべれないんじゃない？

晶 まあ、そうかな。

歩美 ・・・・（もごもごと口を塞いだままモゴモゴとして）ね、ほら、私今口塞いだまま「余計なお世話様」って言ったけど、聞こえなかったでしょ。

晶 まあね。

歩美 じゃあ「開いた口が塞がらない」って、ちょっと変じゃない。

晶 ——— ちょっと言ってみて。

歩美 え？

晶 口開けたまま「余計なお世話様」って。

歩美 ・・・・よへーなおへあはま。

晶 「ま」で口閉じた。もう一回。

歩美 ・・・・よへーな、おへあ、はは。

晶 ほら、開けたままでも言えてない。

歩美 （開けたまま「ほんとだ」ほんほあ。



晶 (開けたまま「ね」へ。

二人、大声で笑い出す。

歩美 (笑い終えながら) もお、止めてよおお。そんな話じゃないのよ。

晶 あ、そだ。何の話だっけ。

歩美 私がおばあちゃんに何て言ったかって話。

晶 あ、そうだった。何て言ったの。

歩美 おばあちゃんが「余計なお世話様」って言ったからあ、私は――

晶 ――「様」っておかしいよね。

歩美 え？

晶 「余計なお世話」はわかるよ。でもなんでそれに「様」をつけるのか、よくわかんないなあと思って。

歩美 え――ほんとだ、なんでだろう。

晶 なんてだろ。

令子 あー、あっつい。

と、家に帰って来た令子、いつの間にか二人の背後(廊下)に現れる。

歩美 あ、令子ちゃんお帰りい。

令子 だいたいま。(汗をハンドタオルで拭いながら)にしてもあっついわ。

歩美 ねえ。もうお外は夏よねえ。まだ6月なのに。

令子 沖繩とか行く奴の気が知れないね。

歩美 あら、沖繩は良いわよお。楽しかったしい。

晶 行ってきたような口ぶりね。

歩美 だってえ、行ってきたんだもん。はい、めんそーれ。

歩美、そう言うって持っていたトートバッグから沖縄土産をドサドサと卓上に広げる。

晶 わ、なにこれ。

歩美 沖縄みやげえ。先週行ってきたの。

令子 (廊下を歩いて行きながら) めんそーれの使い方違ってない？

晶 へー、楽しかった？

歩美 楽しかったあ。美ら水族館とか。ジンベイザメ可愛かったあ。首里城は改装してた感じだったっぱいから行けなかったけど。

晶 ああ、火事になったんだっけ。

歩美 そうなの？知らない。

令子 (戻って来て) —— お、ラフターあるじゃん。

晶 らふてー？

歩美 豚の角煮。美味しいのよお。

晶 ふーん、角煮じゃダメなの。言い方。

歩美 だめよお。沖縄っぽくないでしょ。

晶 ぽかったらいいの？

歩美 いいの。

令子 (物色しながら) にしても沖縄旅行ですか。豪勢ですなあ。

歩美 普通じゃない？これくらい。

令子 (笑って) 普通。

歩美 みんなでわけてね。

晶 はい——これと、これは私もおう。(令子に) いい？

令子 (飽きたようでリモコンを手に取り) どーぞ。

晶 よし。

歩美 (二人の顔を見ながら) 喜んでくれたあ？

晶 うん！

令子 (ＴＶを見ながら) はいはい。

歩美 良かったあ。私、令子ちゃんたちが喜んでくれるのが一番嬉しいの。

令子 はい、ありがとう。

晶 (令子を見て) ごめんねあんな言い方で。

歩美 いいのよ。あの子流の照れ隠しだもん。

令子 ハっ！(笑う)

歩美 ほら図星。

晶 そう？

歩美 (時計を見て) あ、じゃあ私晩御飯の用意あるから帰るね。

晶 あらそう。大したお構いもせず。

晶、  
ぺこつと首から上だけ頭を下げる。

歩美 いえいえ。じゃ、令子ちゃん。帰るね。

令子 はいお土産ありがとー。

歩美 (晶にボソツと) ほらね、照れ隠し。じゃ、またねえ。

晶 うん、また。

歩美、空のトートバッグを丸めて持ち、廊下を出て、玄関口で「お邪魔しましたあ」と一言言って帰って行く。この間、令子どころか晶までお土産を漁って歩美を見送っていない。やがて、晶がお土産をまとめていると、テレビで笑った後の令子が所定の位置に移動しようとして立ち上がる。

令子 普通だってさ。

晶 え？

令子 沖縄行くの。すごいねえ。言ってみてー。

晶 沖縄に？

令子 「沖縄なんて普通に行けるでしょお」ってセリフ。

晶 ああ、言うほう。

令子 （木彫りの熊を手に取り）芝乃ちゃんは北海道に行ってたみたいだし。お金はあるところにはあるのよねえ。

晶 あ、それ。

令子 光がお土産にもらったんだって。

晶 そういう事。なんか熊いるなーって思ってたんだけど（熊を受け取り）これ買うんだ。

令子 （座りながら）可愛かったんだと——ま、金あっても別に行かないけどねえ。

晶 沖縄？北海道？

令子 どっちも。タダなら行くけど。金あってもどっちにも使わないかな。

晶 じゃ、お金あったら何に使う？

令子 わかんない。お金、あったことないから。

晶 わー、悲しー。

令子 そー、悲しい家なのよ、相羽家は。

晶 お父さんいた時も無かったの。お金。

令子 ないない。今よりなかったかも。二人で働いても、お父さん、お金ぜんぶ使ってたから。女とかギャンブルとか女とか。

晶　　げー、そうなの。

令子　私の稼ぎも少なかったしねえ。

晶　　なるほど。悲惨だ。

令子　うちは悲惨でお金の使い方も知らない、悲しい家なんですのよ。

晶　　それは悲惨——これももらっていい？

と、そこに蓮司が現れる。

令子　いいんじゃない——蓮司が良かったら。（蓮司に）これ、いる？

蓮司　（所定の位置に座りながら）要らない。

令子　　ってさ。

晶　　（蓮司に）ありがと。

蓮司　　・・・（首を横に振る）

晶　　あとはひかねえにも聞いとう。

令子　あの子はいいでしょ。どうせ何言っても「いいよ」ってくれるでしょ。

晶　　聞くことが大事でしょ。

蓮司　それはそうだ。

令子　それはそうか。

晶　　じゃ、これは保留。

蓮司　（部屋をキョロキョロして）歩美おばさん、もう帰ったんだ。

令子、それを聞いて少し笑う。蓮司、笑い声に反応するも何も言わない。

晶 帰ったよ。なんか、沖縄行ってきたんだって。  
蓮司 そうなんだ。

令子、また少し笑う。またしても反応するも何も言わない蓮司。

晶 れんにいは、お金あったら何に使いたい？  
蓮司 え、何の話。

晶 沖縄行きたい？

蓮司 え、別に、行きたくない。

晶 そうなんだ。

蓮司 暑いし。

晶 そうだろうけど、ここでも暑いでしょう。

蓮司 もっと暑いでしょう。

晶 そうだろうけど。

蓮司 え、何、行くの？沖縄。

晶 行かないけど。

蓮司 行かないんでしょ。何この話。

晶 ん？意味のない話。

蓮司 (少し笑って) 何それ。

晶 (釣られて笑って) ねー、何それって話。

令子 意味わからん会話。

晶 ねー。

令子 歩美とも意味ない話してたね。

晶 え。

令子 「様」をつけるのがどうかみたいな話。

晶 ——— そうそう。そんな話してた。

令子 なんて様ってつけるのかわかる？

晶 え。

令子 最後に様をつけるとバカ丁寧で嫌味に感じるものなのよ。んでもって、バカは気付かないの。「余計なお世話！」でも嫌な言い方だけど……（丁寧に）余計なお世話、様。

晶 ——— おおおお。

令子 ね、いやらしいでしょ。

晶 うんうん——— うん？そういえば、なんて知ってるの。

令子 なにが？

晶 余計なお世話様の話。

令子 立ち聞きしてたから。

晶 そうなの？

令子 うん、（壁の向こうを指さして）そこで汗拭きながら聞いてた。

晶 えー、そうなの。なんかやらしい。

令子 あら——— （蓮司に）立ち聞きはやらしいんだって。

蓮治 ……

晶 （それは意に介さず）なんて入ってこなかったの。

令子 だって、歩美が面倒そうだったから。暑くて汗かいてたのに、余計に汗噴き出てきそうだもん。

晶 ひどい言い方。

令子 （蓮司に）だからあんたも立ち聞きしてたんでしょ。

蓮司 ……

晶 え、れんにいもしてたの？

令子 汗ふきタオル持ってた時、ドアの後ろに隠れて立ってた。

晶 え、なんで。

令子 歩美に会いたくないんですよ。自分の部屋に居たらいいのに。

蓮司 だって、晶と話したかったから。

晶 そうなの。部屋に入ってくれば良かったのに

令子 (笑って) それが出来たら苦労はないよね。

晶 何それ。

令子、誘い笑いをしながら蓮司に話しかける。蓮司、誘い笑いに釣られる。

令子 ——— (笑いを唐突に止めて) 何笑ってんの。

蓮司 …… (びっくりして急に黙る)

令子 蓮司君、また仕事辞めたでしょお。

晶 え、そうなの？

令子 朝、家に連絡来てねえ。私、仕事休みの日なのに、呼び出し食らったわよ。あんたが高校生の時ぶり。どんだけ成長しないのバカなの？

蓮司 ……

令子 バカ。何でもまた辞めたのバカ。理由あるでしょバカなりの。バカなりのバカな理由教えなさいよバカ。

晶 6回も馬鹿って言った。

令子 ねえバカ。

蓮司 (大声で) バカって言うなよ！

令子 ——— 失礼しました蓮司様。いかなる理由で、今のお勤め先を、お辞めになられたのですか？



蓮司  
・・・

令子  
蓮司様？

蓮司  
なんとなく。

令子  
はい？

蓮司  
・・・

令子  
何と、なく、ですか——ハア、それは大変立派なご理由でございますね。んで、これからは、どうなさるおつもりですか？

蓮司  
違う、所、面接を受ける予定。

晶  
え、そうなんだ。えらいーい。

令子  
（半笑いで）えらいんだ。

晶  
えらいでしょ。今までは辞めたらしばらく働かずに部屋から出てこなかったでしょ。

令子  
普段と違うの？

晶  
大きな違いよ。（蓮司に）で、どこ受けるの？

蓮司  
それを、晶に相談しようかと思って。

晶  
そうなんだ。どこどこ？

蓮司  
（スマホを開いて）ここ、なんだけど。

二人、  
スマホを見ながらボソボソと話始める。

令子  
んー、仲良きことは、美しきかな。

令子、  
テレビを見る。しばらくするとテレビが面白かったのか大声で令子が笑う。その声に反応して蓮司、黙る。

晶  
私の部屋で話す？

蓮司　・・・うん。

晶と蓮司、部屋を出ていく。令子、二人が去った廊下を見ている。と、玄関の方から光の「ただいま」という声が聞こえる。それに準ずるようにテレビに首を向ける令子。やがて光、部屋の前を通る。

光　ただいま。

令子　（テレビを見たまま）おかえりー。

光　（キョロキョロしながら）晶は？出かけてる？

令子　自分の部屋。

光　そう。

令子　蓮司も一緒。

光　——そう。珍しい。

令子　（光の方を向いて）光さん、どうぞこちらに。

光　え・・・うん。なに？

光、令子に促され所定の位置へ座る。

令子　えー・・・しばらく、光熱費を頂戴することになりそうです。

光　え——え、また？

令子　チーうし君がまたしてもやってくれました。

光　そう・・・えー、そう。

令子　光選手、何とか飲み込もうとされております。

光　だって、しょうがな——えー、また？

令子 光選手、飲み込めない。飲み込めない様子です。

光 ……（軽く深呼吸して息を吐きつつ）……そっかあ。

令子 飲み込んだ。

光 しょうがないんでしょう？

令子 私からしたらしょうがなくなんかないけどね。

光 晶はしっかりしてるのに。

令子 誰に似たんだろうねえ。あ、お父さんかあ。顔も、いい加減なところもそっくり。お父さんと違ってモテないけど。顔、一緒なのに。

フフ、なんてだろうね。

光 それはわかんないけど。

令子 あんたは、どっち似？

令子、真っ直ぐ光を見つめる。光、目を逸らせないでいる。しばらく見つめ合う二人。やがて令子、ニコッと笑って光の頬を触る。

令子 あんたは私似よねえ。かわいいかわいい。

令子、そう言うテレビを見出す。光、呆氣にとられつつも自身の頬をさわり若干嬉しそうにしている。

令子 ……顔はね。

光、ビクツとして落ち着かなくなる。やがて立ち上がるとギターを持って歌い出す。伴奏（カステネット）として晶もいる。

光 これはやばいですね。やばいです。やばいので歌いますね。聴いてください。『ギシギシする』

♪『ギシギシする』

ギシギシする ギシギシする  
ギシギシするなあ

桜でギシ 浮気でギシ  
八つ当たりギシギシ

話が噛み合わない時も  
知ったかぶりをしていても  
光熱費を立て替えさせられても

(歯ぎしりを)  
ギリギリしても  
ギリギリしても

ギシギシしようぜ

光      お次は夏まっさかり。7月だぜ。センキュー。

空間が、光の会社へと変わっていく。

7・七月

光の会社。夏服の光と松下と早川。無言で仕事をしている。カタカタとタイピングの音が聞こえる中、松下が打つのを終えて大きく伸びをする。

松下　くくくあー・・・終わったー。

早川　（打ちながら）おつかれさま。

松下　おつかれさまです。あー、肩痛っ。

早川　肩こり？

松下　最近酷いです。

早川　仕事、頑張ってる証拠ね。

松下　あ、それはないです。スマホいじりすぎなだけで。

早川　はっきり言うわね。

松下　頑張らないのがモットーなので。

早川　（笑って）スマホいじりすぎなの？

松下　リール動画ずっと見ちゃうんです。

早川　（タイプを止め）わかる。あれ見ちゃったら止まらないよね。

松下　アルゴリズム様様と同時にアルゴリズムの野郎って思います。

早川　（笑って）どっちもあるわね。

早川、またタイプし出す。松下、無言で間仕切りから光の様子を見る。必死にPCと格闘している様子、且つ、ブラインドタッチが出来ないので松下に気付かない光。

松下 (間仕切りから顔を戻し) 早川さん。何かやっとく事あります？

早川 あら珍しい。

松下 ボーっとしとくのもなあと思って。

早川 ー、あ、じゃあ麦茶欲しいかも。

松下 承知しました。

松下、間仕切りから空になった早川の空のグラスを受け取る。

松下 相羽さんもいる？

光、集中していて松下の声が聞こえない。松下、また間仕切りから顔を出す。なおも気付かない光の眼前にゆっくり顔を出していく松下。

光 ——うわあっ！なんですか？

松下 (ニツと笑って) 相羽さん、集中してるね。

光 え？

松下 麦茶、お代わりいる？

光 え、あ・・・んー・・・

光、やたら悩む。松下、見かねてスと光のマグカップを手取る。

光 ——あ。

松下 (ピツと敬礼して) 日が暮れますので。

光 ……(敬礼し返して) よろしく、お願いします。

松下、少し笑って。部屋を出ていく。しばらく二人のタイプの音だけが聞こえている。と、そこへ手ぶらの松下が戻ってくる。

松下 残念でした。

早川 え、何が？

松下 麦茶切れちゃってました。ストックもゼロです。

早川 あらそう。残念。

松下 今週のお茶当番、第一でしたよね。

早川 そうね。

松下 これで何度目ですかね。他の課が担当の時はこんな事無いのに。

早川 そうね。

松下 クレーム入れても「僕たち忙しいから」ですもんね。ま、実際そうだけど。

早川 そうなのよね。

松下 —— いっそ、当番から外したらどうですかね。

早川 え。

松下 あの人たち当番から外した方が手っ取り早くないですか。

早川 んー。

松下 どうでしょう。

早川 松下さんが入社する前に、相羽さんが一度提案したのよね。

松下 え、そうなんですか。（間仕切りから顔を出して）相羽さん。

光 —— え、わ！え、なんですか？

松下 麦茶です。

光 麦茶？

早川 お茶の当番、営業一課は当番から外しませんか、って話。  
光 え？あ・・・  
早川 相羽さん、前に提案したよね。  
光 ———— はい。  
松下 そうなんです。で、なんで駄目だったんですか。  
光 え。  
松下 駄目だったから今もそのままなんですよね。  
早川 話、早いわね。  
松下 無駄に遅いの嫌いなんて。無駄は、無駄なので。  
早川 それはそうとしか言いようないわね。  
松下 で、なぜ？  
光 それは・・・その、第一の課長が、ふざけるな、と。  
松下 え、なんて？  
光 え、と、それは——  
早川 「女でも出来る事が男に出来ないとも言いたいのか！」だって。  
光 ……怒鳴られました。  
松下 ———— いやいや。  
早川 ねー。  
松下 ねいわれいわ。  
早川 ねー。  
松下 化石ですね、そこまでいくと。  
早川 流石に問題にしようかと思っただけ。相羽さんが——  
光 ぜ、絶対だめです絶対だめです、絶対に、だめです。



早川　——ってパニック起こしたからね。（光の背を擦って）もう終わった話だから。  
光　は、はい、ありがとうございます。

光　一年前のことなのに当時と同じレベルで焦っている。松下、何やら考えるポージングをしている。

光　松下さん？

早川　ん、え——どうしたの？

松下　私、ちょっと行ってきます。

早川　どこに？

松下　第一です。

光　え。

早川　何しに？

松下　お茶の当番外れて下さいって言いんです。

早川　え？

光　え、ちょ、ちょっと——

松下　（光の肩を掴んで）相羽さんの名前は出さないの、大丈夫。

早川　ちょっと、松下さ——

松下　（笑顔で敬礼して）手、空いてるんで。行ってきます。

松下、颯爽と出ていく。呆然と見送る二人。

早川　・・・行っちゃったね。

光　行っちゃいました。どうしましょう。

早川 んー、（自分の席に着きながら）ま、なるようになるでしょ。

光 そうなんですか？

早川 わかんないけど。まあ、相羽さんの名前出さないって言ってるし、大丈夫じゃない？

光 そうですね。あ、でも、早川さんは――

早川 課長に呼ばれるかもね、大丈夫、うっとうしいだけだから。

光 大丈夫じゃない！

早川 ハハ、それよりやらないといけないことがあるからね。

光 え、なんですか、それ。

早川 これと、それ。

早川、自身のデスクと光のデスクを指さす。

早川 （ニコっと笑って）仕事。

光 え、あ、そうでした！（座りながら）やらないといけない事ありました。

早川 がんばろっか。

光 （敬礼して）がんばります！

早川、光の元気な返事にニコっと笑う。しばし、二人のタイプの音が聞こえる。が、光は出て行った松下が気になりチラチラと出て行った先を見ている。

早川 ……気になる？

光 え、いや・・・はい。

早川 でも、手は動かそうか。

光　　でした、はい。

光、焦ってタイプし出す。と、早川、手の動きを止めて間仕切りから顔を出す。

早川　相羽さん。

光　は、はい。(間仕切りから顔を出し) なんてしよう？

早川　私お金出すから、一階で何か飲み物買ってきてくれない。

光　え。

早川　(千円札を差し出して) はい。

光　あ、いや、行きますけど、私のはいいです。自分で出します。

早川　でも、買ってきてくれるのに。

光　私も、丁度、のど、乾いてたので。大丈夫です。

早川　そう。じゃあ、はい。(お金を渡す)

光　はい。何買って来ましょう。

早川　お茶を二つ。私のと、松下さんの分。

光　あ、はい。じゃ、行ってきます。

早川　お願いします。

光　はい。

光、出ていく。早川、その様子を見た後に、自身のカバンから個包装のチョコレートを出すと、一つを松下のデスクに。光のデスクには二つチョコを置く。置いた後に光のPCに目を通すと、少し考えた後にPCを操作し、光のミスを訂正している様子。

早川　ん・・・なるほど・・・うん、これで・・・よし。

と、帰って来ていた松下。その様子を見ている。

松下 ——— 行って参りました。

早川 (チヨコを一つ取って振り返り) お帰り。どうだった。

松下 あ、はい。第一は今後、お茶の当番から外れる事になりました。

早川 あら・・・そう。

松下 はい。

早川 怒鳴られたりしなかった？

松下 はい。(スマホを取り出し)これを・・・(かざして)こう、ボイスメッセージを録音する体でおりましたので。

早川 おー、なるほど。

松下 なので、大丈夫です。

早川 そう。おつかれさまでした。

松下 いえ。で、相羽さんは？

早川 あ、下の自販機にお茶買いに行ってもらってるの。  
松下 なるほど。

早川、自身のデスクに戻る。松下も戻り、席に着く。早川はまた対応を始める。

松下 ——— 相羽さんの、直しですか。

早川 ・・・・うん。そうね。

松下 優しいですね。

早川 優しいって言うのかな。

松下 優しいくない、ではないんじゃないですか。

早川 ま、厳しくはないわね。甘やかし過ぎかな。

松下 どうでしょう。仕事が早く終わるなら何でもいいんじゃないですか。

早川 育たないかもしれないの？

松下 育つかどうかは本人次第じゃないですか。

早川 お厳しい。

松下 普通です。人によって普通な事を厳しく感じるかどうかってだけの話です。

早川 (手を止め) それは、そうね。

松下 何でも男が正しいって思うのがその人にとっての「普通」なんだったら、それは普通なんでしょう。私からしたら異常ですけど。  
早川 そうね(また打ち出して)ま、令和どころか、昭和以前？

松下 (少し笑って) ですね。あと——いつも私へのチョコが一つで、相羽さんへのチョコが二つなもの、普通なんですよね。  
早川 え。

松下 (包みを開けて口に放り込み) いただきます。

早川 ……バレてたかあ。

松下 (笑って) えこひいきですか。

早川 んー…そうかも。

松下 ひどいなあ。

早川 ごめんなさい。

松下 お気に入りですもんね。相羽さん。

早川 あなたを気に入ってない訳ではないのよ。

松下 存じております。

早川 あの、「必死でどうにか松下さんに負けないように頑張ろうって」姿を、隠してるつもりで隠せてないのがねえ、いいの。  
松下 ハハハ。

と、お茶のペットボトルを2本と缶コーヒーを持った光が入ってくる。

光 お待たせしましたあ。

早川 あ、お帰りなさい。（お茶とお釣りを受け取り）ありがとうございます。

光 麦茶切れてたから、自販機混んでました。（松下に）あ、これ早川さんが。

松下 え、あ、ありがとうございます。

早川 いえいえ。ひいきにさせてもらってますんで。

松下 フフ、どうも。

早川も笑う。光、「ん？」と思いつつ自分の席につこうとするも、「あ」と何かを思い出し、松下の元に行く。

光 あの、どうでした？

松下 え、ああ。今後、第一はお茶当番しないそうです。

光 え、そうなんですか。

松下 そうなんです。

光 どうやったんですか。

松下 どうやったって・・・普通かな？

光 え？

松下 普通。

早川 普通よね。

松下 普通。

松下と早川、また共に笑う。光、狐につままれたような顔をする。

光 普通・・・(誰にも聞こえない声で) なんだろう・・・モヤモヤする。もやもやもや・・・

と、会社だった空間が、相羽家の居間へと変わっていく。

8. 八月

扇風機が首を振っている、相羽家の居間。光が居間でくつろいでいる。くつろぎすぎて目をつぶり、徐々にスライムのようにだらーと床に溶けるようにだらついている。と、そこに蓮司が現れ、姉の痴態を一瞥して座卓から離れた場所に座る。  
※光が蓮司の所定の位置に侵食していたため。

光 (ボソボソと) もやもやもや・・・

蓮司 ……(チラと光を見る)

光 ……

蓮司 ……(スマホを開こうとする)

光 (伸びをして) もやゝゝゝあああつ！

蓮司 (ビクツと反応)！

光 ……

蓮司 ……(凝視している)

光 (ボソリと) ……もや

蓮司 (軽く反応) ……

光 (もぞもぞ動きながら) もやもやもやもやもやもや・・・

蓮司 ……

光　　もやもやもやああーっ!!

光、雄たけびと共に伸びをしながら状態を起こす。蓮司、その様をジーンと見ている。

光　　ああ・・・はあーっ・・・(立ち上がる)・・・だる・・・買い物行こ。

光、蓮司がいることに気付かずボソリとつぶやき部屋を出ていく。一連を無言で見っていた蓮司、光が出ていくのを見ていたが、やがてスマホに向き直る。と、居間に何者かがいた気配を感じた光が戻って来て蓮司がいたことに驚きの声を上げる。

光　　——え！蓮司居たの？

蓮司　いたよ。

光　　・・・そ。

蓮司　買い物行くんでしょ。行ったらっしやい。

光　　あ・・・行ってきます。

光、トボトボと自分の部屋へ歩いて行く。スマホで動画を見ている蓮司。見ながらゆっくり自身の所定の位置へと移動していく。と、光が家計財布を持って廊下を通過していくが、半身だけ戻って蓮司に声をかける。

光　　・・・晩御飯の買い物行ってくるけど、何か要る？

蓮司　・・・(聞こえないフリ)

光　　・・・れ、蓮司、何か——要・・・

光、無反応に心折れ、徐々に声が消えいり、気まずそうに歩いていく。蓮司、光が出て行ったか即座にチェックして、またスマホを見るの



に勤しむ。時折、動画の内容に笑ったり突っ込んだりしている蓮司。と、そこに外出していた晶の「ただいま」の声が聞こえ、晶、居間に入ってくる。

晶 (蓮司を見て) ただいま。

蓮司 (晶を見て) お帰り。

晶 (本とカバンを置いて座り) ただいま。あー暑っ。

蓮司 暑かった？

晶 暑かった。ってか、今も暑い。

蓮司 そう。麦茶いる？

晶 いる。あ、自分で入れるよ。

蓮司 そう。

晶 (立ち上がり) れんにいもいる？

蓮司 ん、俺はいい。

晶 そ。

晶、台所へ行く。蓮司は変わらず動画を見ている。やがて晶、グラスに麦茶を入れて居間に戻ってくる。

晶 (麦茶を飲みながら座り) ——ぶはーっ生き返った。

晶、借りてきた本を一冊手に取りパラパラとめくると、カバンからノートと筆記用具を手に取り、勉強を始める。勉強をしている横で声やブツブツ何かをつぶやいている蓮司。晶は気にせず勉強を続けるしばらくして動画を見ていた蓮司が口を開く。

蓮司 ……晶。勉強中？

晶　　・・・うん。

蓮司　そう。

晶　　うん。

蓮司　・・・話、してもいい？

晶　　・・・いいよ。

蓮司　いい？

晶　　うん。

蓮司と晶、各々スマホとノートを見ながら会話をしている。

蓮司　信長っているでしょ。

晶　　・・・織田？

蓮司　織田。

晶　　うん。

蓮司　あと、秀吉っているでしょ。

晶　　豊臣？

蓮司　うん。で、信長が秀吉をサルって呼んでたでしょ。

晶　　らしいね。顔がおさるさんに似てるからでしょ。

蓮司　あれ、どうもデマらしくて、本当はハゲねずみって呼んでたんだって。

晶　　そうなの。

蓮司　うん。

晶　　はげねずみ。

蓮司　ハゲねずみ。

晶 ふーん・・・なんで？

蓮司 なんか、頭が禿げてて、顔がネズミに似てたから、らしい。

晶 まんまだ。

蓮司 秀吉の浮気グセが酷くて、奥さんが、めちゃくちゃ怒ってたらしくて、信長がその奥さんをフォローするために手紙を送ったんだって。

晶 へー。

蓮司 で、その手紙に「あのハゲねずみにとって、あなた以上の女性はいません」って書いてるんだ。

晶 信長、良い上司

蓮司 だね。

晶 (顔を上げて)・・・でも、秀吉の奥さんってどんな気持ちだったんだろうね。自分の旦那さんの事をハゲねずみって呼ばれて。

蓮司 (顔を上げて)・・・んー、どうだろう・・・

蓮司、スマホで何やら検索し始める。晶はその様子を見ている。

蓮司 (しばらくして)・・・どこにも載ってないね。

晶 (ノートに目を移し)そ。

蓮司 まあ何とも思ってたなかったんじゃないかな。禿げは事実だろうし。

晶 浮気野郎は、ハゲネズミ呼ばわりがお似合ってことか。

蓮司 浮気ありきはわからないけどね。

晶 そもそも浮気してる旦那さんを擁護しないか。

蓮司 そうかも。

晶 お母さんもお父さんの事、擁護するの見た事ないし。

蓮司 ・・・・あ、うちのお母さん？

晶　そう。悪口ばっかでしょ。

蓮司　確かに。

晶　（顔を上げて）・・・でも、なんで「お父さん」なんだろうね。

蓮司　え？

晶　呼び方。お父さん、女の人作って出て行ったんでしょ。

蓮司　そう、らしい。俺も、小さかったからよくわかんないけど。

晶　お母さん口悪いから、「アイツ」とか「あの野郎」とか言いそうじゃない。

蓮司　（笑って）確かに。言いそうだね。

晶　——未練あるとか？まだお父さんの事好きとか？

蓮司　どうだろ・・・

蓮司、スマホで何か検索する。

晶　（笑って）なんて検索するの？

蓮司　浮気・夫・呼び方・・・

晶　なるほど。なんか出た？

蓮司　・・・クソ旦那。

晶　（笑って）クソ。

蓮司　うんこ野郎。

晶　一緒じゃん。

蓮司　ハゲ——あ。

晶　あ、ハゲ、ハゲきた。

蓮司　「夫は実際はハゲてないことも多い」だって。ハゲてないけどハゲって言うんだって。

晶 (笑って) なるほど。浮気してる奴は心がハゲてるってことだね。

蓮司 わかんないけど、秀吉も浮気先行でハゲ呼ばわりされた説あるかもね。  
晶 で、「お父さん」って呼んでる人は、いそう？

蓮司 ー、なさそう。

晶 そりやそうだろうねえ。

蓮司 ないね。

晶 お母さんまだ未練ある説、あるね。

蓮司 あるかな。

晶 (笑って) わかんない。そっちの方が面白くない？

蓮司 どうだろう。

晶 れんに聞いてみてよ。

蓮司 え、俺が？い、嫌だよ。怒られるし。

晶 えー、怒らないでしょ。

蓮司 怒られなくても、なんか嫌味とか言われるよ。また「お父さんに似てる」とか。

晶 言われるね。

蓮司 ・・・え、聞いた方がいい？

晶 (笑って) うそ。聞かなくていいよ。ひかねえに聞いてもらうから。

蓮司 ねえちゃん・・・一緒に気がする。晶が聞いた方がいいんじゃない。

晶 私が聞いたら普通に教えてくれるでしょ。それじゃ面白くないもん。

蓮司 ・・・やっぱ似てるね。お母さんに。

晶 おお？どこが？

蓮司 なんか、そういう所。

晶 そーかな。全然違うと思うけど。

と、玄関から光の「ただいま」の声が聞こえる。

晶 あ、帰って来た。

光 はー、暑い、（現れ）ただいま。

晶 おかえりなさい。

蓮司 （スマホをいじりながら）おかえり。

光 あ、晶、帰ってんだ。

晶 ただいま。ね、ひかねえ。

光 （台所買った物を持って行きながら）んー、なにー？

晶 お母さん、なんでお父さんの事を「お父さん」って呼ぶの？

光 えー？・・・（荷物を置いて居間に入って来ながら）・・・お父さんだから、じゃない？

晶 そうじゃなくて、なんで、クソとかうんことかハゲとか言わないの？

光 ・・・え？くそ、はげ？

晶 普通は浮気する男にそう言うんだって。

光 え・・・そうなの。くそはげ？

晶 普通はね。なのうちのお母さんはお父さんって呼んでるでしょ。それって、まだお父さんに未練あるってことなんじゃないかな。

光 急に何の話？——あー、暑っ。

光、逃げるように扇風機の前に行く。

晶 で、それをひかねえからお母さんに聞いてもらえないかなって。

光 え、なんて私が。

蓮司、スマホを見ながら笑う。

光　なに笑ってんの。

蓮司　・・・(無視する)

晶　ね、気にならない。

光　・・・別に知らない。

晶　私とれんにはお父さんの事あんまりよくわからないけど、ひかねえは私たちより知ってるでしょ。

光　そりゃ、まあ。

晶　ね、だったら聞いても自然でしょ。

光　いや、不自然でしょ。

晶　なんで？

光　なん——っていうか、興味ないし。

晶　えー、知りたくない？浮気されて、女作って出ていった男に、「お父さん」っていう女の人の気持ち。

光　別に、知りたく、ない。

晶　そう？

光　そう。

晶　そう——ちえーっ面白くないなあ。

光　なんでそんな話するの。あー暑い。

蓮司、また笑う。

光　(蓮司に)・・・あんたが、変な事言ったんじゃないの。

蓮司　・・・(無視して)

晶 (笑って) 違うよ。私が興味あっただけ。

光 (晶のノートと借りてきた本を見て) 晶、勉強してたんですよ。

晶 え、うん。

光 (蓮司に) 晶、こんな暑い中図書館行って、本借りてきて、資格の・・・(晶に) 何の資格だっけ。

晶 え、簿記一級。

光 ほら、簿記の、資格の勉強してるのに、どうせあんたが邪魔してくだんない話したんですよ。

蓮司 ……

光 ちよつと、聞こえてるくせに無視しないでよ。

晶 (笑いをこらえながら) ひかねえー、違うよー。

光 違うじゃないですよ。違ってたなら、この子、違うって言うですよ。

蓮司 (ワイヤレスイヤホンを外し) 違うじゃないよ。俺が、くだらない話したんだよ。(晶に) 勉強の邪魔してごめん。

晶 え。

光 ほら、やっぱそうでしょ。晶はねえ。あんたと違って、生まれつき、よく、よく出来た子なのよ。で、それで、仕事しながら真面目に勉強して、お家のために、資格取るために、勉強してるんですよ。だからこんな暑い中図書館まで行ってたんですよ。

晶 図書館エアコンついてるから。

光 え。

蓮司 姉ちゃんとも違ってでしょ。

光 え。

蓮司 晶は俺と、姉ちゃんとも違って、勉強出来るんだろ。

光 え、え。

蓮司 あと、晶は生まれつきじゃなくて、ちゃんと勉強してきたから俺たちより頭いいんだよ。そこ間違うなよ。

蓮司、言いたいことを言って居間を去る。



光 （蓮司を追いつながら）え、あんた、なに、言つて、え？ええ？ちよつと、私が、頭悪い、つて、え？それ、そんな事、ええ？そんな、

あ、あんた、ば、ば、ば、バカ者おお！！

光、大興奮で残念な怒号をかます。晶、こらえきれず大笑い。

晶 あっははははは！！

光 え？え、晶？

晶 （笑いを抑えながら）ごめん・・・はあーっ（笑いをどうにか抑えて）・・・ごめんね。

光 え、いや、なんで晶が謝るの？

晶、荷物をまとめる。

光 晶？

晶 （立ち上がり）私の部屋の扇風機、強がこっちの部屋の弱ぐらいしかないから、ここで勉強してるだけなの。

光 え、じゃ、こゝでしたら――

晶 （去り際に笑顔で）あんまりれんにいのこと悪く言わないであげてね。

晶、自分の部屋に行く。

光 え・・・悪く言われたの、こっちじゃ・・・なんなの・・・ご飯、用意しよう。

光、台所に行きかけるがスタスタと居間に戻ると扇風機の前行き、近距離で風を浴びる。

光　くそはげええええ・・・ああああ・・・もおやあもおやあするううう・・・もやもやもや・・・

と、相羽家の居間が夜景の見えるオシャレなカフェバーへと変わっていく。

9・九月

夜景が見えるカフェバー。丁度美しい月が見られる日で空には満月が・・・流れの速い雲の合間で見えたり見えなかったりしている。その店の窓側の席に、芝乃が一人、座っている。スマホを触りつつ、時計を気にしたりしている。と、そこにハアハアと息を吐いている、慌て姿の光が現れる。光、キョロキョロと芝乃を探している。芝乃、先に光に気付き、手を振る。光、それに気づいてこれまた慌てて芝乃の元に行く。

光　ごめーん、遅くなりました。ほんとごめん。

芝乃　ううん、大丈夫。

光　ごめん、ちよっとお店の場所がわかんなくて。

芝乃　ちよっとわかりにくかったよね。

光　っていうか、グーグルマップ使ったら、なんか、自分の向いてる方向がわからなくなっちゃって。

光、混乱時のジェスチャーをしつつ説明する。

芝乃　あー、あるよね——あ、ここのお店、先にカウンターで注文してお酒受け取るスタイルなの。

光　え、そっか。じゃ、行ってくる。

芝乃　光、疲れてるでしょ私注文してくる。ビールでいい？

光 え、いいの？ごめん正直しばらく歩きたくないくらいしんどい。

芝乃 わかった。ゆっくりしてて。

光 しのー、ごめーん。

芝乃 (少し笑って) いいって。

芝乃、カウンターへと歩いて行く。光、息を落ち着かせてしばし目をつぶる。と、外の満月の光に気付き、今更ながら夜景の美しさにも気付いて感嘆の声を上げる。

光 おおお・・・おおおお。

芝乃 (ビールを持って来て) きれいでしょ。夜景。

光 うん！(振り返りビールに気付き) あ、ありがとう。

芝乃 (座りながら) うん。あ、ごめん私先にいただいてたよ。

芝乃、飲みかけのカクテルグラスを持っていたずらっぽく笑う。

光 ううん。ほんと、お待たせしました。

芝乃 もういいって。ほら、乾杯しよ？

光 うん、かんぱーい、

芝乃 はーい、乾杯。

乾杯をする二人。芝乃少し口をつけ、光は半分くらい一気に飲む。

芝乃 (グラスを置きながら) いい飲みっぷり。

光　　ぷはーっ、生き返った。

芝乃　もー、おじさんみたい。

光　　え、うそ・・・あ、あーおいしー。

光、自分に出来る最大のセクシーさを出してみる。芝乃、失笑。

芝乃　（失笑を隠し）・・・きれいだね。

光　　え、うん・・・あー、今日十五夜だっけ。

芝乃　十五夜じゃないけど、満月ね。このお店、凄くきれいに月が見られるから、いつか光と来たいなって思ってた。

光　　そうなの、うれしー。ありがとう。

芝乃　おおげさね。

光　　ううん、ほんとに嬉しい——（ビールを一口飲み）ぷはっ、お酒も美味しいし。（店を見渡し）ほんとにいいお店。

芝乃、光の一連の様子に朗らかな笑みを浮かべる。光、景観を堪能しつつもう一口ビールを飲んで、口を開く。

光　　——あ、じゃあ、来たことあるの、このお店。

芝乃　うん、前に一度ね。

光　　そう・・・あ、彼氏さん？

芝乃　うん、前にね。

光　　前の？

芝乃　んー・・・前の、前のかな。

光　　かなって何よ。アバウトー。

芝乃　（笑って）ねー。

光　　もー、他人事みたい。  
芝乃　　そうだね。

二人、ひとしきり笑う。

芝乃　　（一口飲んで）そういえば、仕事、１７時までだよ。一回、帰って来た？  
光　　え、ううん。着替え持って会社行って、そのままロッカーで着替えて来たよ。芝乃は？  
芝乃　　私も一緒。え、私は仕事１９時までだから、終わってそのまま来たけど、光はそれまでどこかで時間つぶしてたの？  
光　　（首を横に振って）ううん・・・ウフフ。

光、不敵な笑みを浮かべる。

芝乃　　え、なにに？その笑い。

光　　あのねー、ウフフ。

芝乃　　うん。

光　　通君と、デートしてきたの。

芝乃　　え、あ——そうなんだ。

光　　ウフフ、そうなお。

芝乃　　へー、それで、そんなご機嫌なんだ。

光　　そうなの・・・で、ごめん、ちよつとだけ、飲んできちゃったの。

芝乃　　え・・・そうなの。

光　　ごめんね。

芝乃　　ううん、いいけど・・・逆に良かった？

光 え、何が？

芝乃 デートが先、だったんじゃない？

光 ううん。芝乃との約束が先だよ。

芝乃 あ、そうなんだ。

光 うん。だから、大丈夫。

芝乃 大丈夫。

光 うん。

光、上機嫌でビールを飲み干す。芝乃、光を神妙に見つつ、グラスを空ける。

光 はー、美味しい。お代わりしよっかな。

芝乃 あ、私も。

光 (頬を抑えて) はー、ちよっと酔っちゃったかも。

芝乃 え、そう・・・どれくらい飲んで来たの？

光 えーと、ビールばかり3杯かな。

芝乃 え、(指さして) これ入れて？

光 それ入れて4杯。

芝乃 あ、そーなんだ。

光 うん、私い、ビール好きだから。

芝乃 そーなんだ・・・でも、酔って来たなら、ソフトドリンク挟もうか。ここ、ノンアルコールカクテルも美味しいのよ。

光 そうなの？じゃあ、それにする。

芝乃 私注文してくるから待ってて。

光 うん、ありがとー。

芝乃、空のグラスを持ってカウンターへ行く。光、芝乃を見送りつつまた店内を見回し、また窓の外を見る。

光　　いやー、いい夜だ。フフ、いい夜だなー。

光、ぶつぶつぶやきながら、上機嫌のあまり何やらラブソングを歌っている。ひどく下手である。やがて光、満月が雲で隠れているのに気づく。

光　　（歌うのを止めて）・・・あれ、月、見えなくなっちゃった。

光、雲の向こうの月をボーっと見ながら、何故か『荒城の月』を歌う。もちろん下手である。と、芝乃、グラスを二つ持って戻ってくる。

芝乃　　・・・上機嫌だねえ。

光　　——あ、うん。でも、月見えなくなっちゃった。

芝乃　　え——ああ、今夜は風が強いから——ほら、また出たよ。

光　　あ、本当だ。めてたいなあ。

芝乃　　フフ、めてたい、かなあ。

芝乃、そう言いながら光へノンアルカクテルを渡す。

光　　あ、ありがと。（一口飲んで）んんー、これまた美味しい。

芝乃　　でしよ。

光　　（敬礼して）です。フフ。

光、上機嫌で荒城の月の続きを歌う。芝乃、周りのテーブルを多少気にしながらも笑い、一口カクテルを飲む。

芝乃 (グラスを置いて) 通君とのデートは、何時からだったの？

光 ——— ええ？ああ、6時から、7時半くらいまで。

芝乃 そう。

光 駅前のお、弥太郎で。

芝乃 弥太郎——— ああ、あのニッパチ居酒屋の。

光 そう。コスパいいのよお。通君とお酒飲むときはいつもあそこに連れて行ってくれるの。

芝乃 そうなんだ・・・楽しかった。

光 うん。

芝乃 そう。

光 うん。(一口飲んで) ほんと、これ美味しいね。

芝乃 そうね。

芝乃、光を見ていたたまれない気持ちになり、また、光をいとおしく思え、光の手を握る。

光 え・・・え？芝乃？

芝乃 うん。

光 え・・・どうしたの？

芝乃 (手を離して) ううん。なんでもない。

光 ——— そう。

芝乃 うん。フフ、楽しいね。

光 うん。フフ、楽しい。



芝乃 うん。  
 光 フフ、変なの。  
 芝乃 変？  
 光 うん、フフ、変。へーん。  
 芝乃 そう？——そうかも。変だね。  
 光 そうよお、なあに？通君のことばかり聞いてきて。  
 芝乃 ううん。なんでも。  
 光 えー、なあになんでもって。  
 芝乃 なんでもはなんでも。  
 光 もお・・・フフ、ウフフ。  
 芝乃 なあに？  
 光 ウフフーダメだよ？  
 芝乃 え？フフ、なにが？  
 光 通君、狙ってるんなら、ダメだよ。  
 芝乃 (長い沈黙)・・・え。  
 光 気になるんではよ。通君のこと。  
 芝乃 ・・・・うん、いや、ううん。ならないならぬ。  
 光 ダメだからね。通君は、あたしの。  
 芝乃 うん——うん、光、ちよつと飲み過ぎだね。  
 光 そんなことはないよ。フフ、まだまだ大丈夫。  
 芝乃 大丈夫じゃない人はみんなそう言うよ、そんな感じで。酔ってるって。  
 光 そんなこと言ってる。芝乃も酔ってるんじゃないの？通君に。  
 芝乃 ・・・・うん？・・・フフフ、え？フフフ・・・うん？えー、うん、うん？

芝乃、光の言う事が理解出来ずに佐藤二郎みたいになる。

芝乃 んー・・・うん。わかった。気になってるでいいから、認めるからこの話は終わり、ね。

光 えー、終わり？・・・うん、いいよ。

芝乃 ありがと。

光 いいええ。

芝乃、光について先ほどまで抱いていた、いたたまれない気持ちやいとおしさは霧散して、ただ窓の外を眺めている。光もそれに釣られて外を見る。

光 あ、また見えなくなったねえ、満月。

芝乃 そうね。

光 —— と思ったたらまた、出てきたあ。

芝乃 そうね。出て来たね。

光 と思ったら、また消えちゃった。

芝乃 ・・・ね。

光 出たり消えたりだねえ。

芝乃、カクテルをグツと飲み干すと、空になったグラスを持ったまま立ち上がる。

芝乃 出たり消えたり、もやもやするね。(微笑んで) お代わりしてくるね。

光 うん。

芝乃、カウンターへ向かう。その背を見つづめた店内へ、窓の外へと視線を移す光。やがて立ち上がり、ギターを手にするとMCを始める。  
※伴奏が晶のカスタネットに引き続き、蓮司がトライアングルで参加している。

光　　芝乃、もやもやしてるんだね。じゃあ、そんな芝乃と今宵の月に捧げるソング、聞いて下さい。『モヤモヤする』

♪『モヤモヤする』

モヤモヤする　モヤモヤする

モヤモヤするなあ

麦茶でモヤ　図書館でモヤ

満月でモヤモヤ

普通に出来ると言われても

弟と妹が呆れても

友達が彼氏に興味を持っても

(そんなこたない)

モタモタしても

モタモタしても

モヤモヤしようぜ

光      最後は秋から冬。１０月だぜ。センキュー。

空間が、相羽家へと変わっていく。

１０．十月

相羽家の居間。歩美がアウトドア感全開の服装で、晶の所定の位置に不満そうに座っている。相羽家の面々は廊下を所狭しとわちゃわちゃ移動している。歩美、その様子を見て不満げにため息をつく。と、歩美の様な格好を整えた晶が居間に入って来て、蓮司の所定の位置に座る。

歩美    ……一番乗りは晶ちゃんね。

晶      （ペコリと頭を下げ）どうもお待たせしております。

歩美    （けだるげに）ううん……まあそんな気はしてたからあ、だいじょうぶ。

晶      全然大丈夫そうじゃないよ。

歩美    だいじょうぶだいじょうぶ。予約してたキャンプ場の人にー時間遅れますって伝えたら、ちよつと遅れただけだからあ。

晶      全然大丈夫じゃないじゃん。ごめんね。

歩美    ううん、晶ちゃんが謝る事じゃないよ……晶ちゃんね。

と、廊下をガラガラと令子が歩いてくる。

令子    そだね。ごめんごめん。

令子、さらっと謝って廊下を通って行く。

歩美 ……

晶 ほんと、ごめんね。

歩美 いいのよお。いま、謝ってもらえたしい。

晶 そう——には、あんまり見えないけど。

と、そこに簡単な外行きの服に着替えてきた蓮司。きよろきよろして光の所定の位置へ座る。

晶 お、二番手はれんにいか。

蓮司 (歩美にぺこと頭を下げて) ども。

歩美 (ちよっとテンションが上がり) はーい。

蓮司 お待たせして、すいません。

歩美 ううん、蓮司君が来てくれるの嬉しいのよ。だから、いいのよお。

蓮司 ……

晶 ほら、歩美ちゃん嬉しいんだって。

蓮司 ……(適当にぺこと頭を下げる)

歩美 いいのいいの。(嬉し気に晶に) 珍しいわね、蓮司君来てくれるの。

晶 え——そうだね。(蓮司に) 珍しいよね。どういう風の吹き回し?

蓮司 ……別に。

晶 (真似して) ……別に。アハハ。

歩美 (同じく真似して) 別に。アハハ。

二人、顔を合わせて笑う。蓮司、まったく気にしておらず無反応のまま、スマホをいじり出す。と、そこに服装が無茶苦茶な光が入って来て、きよろきよろとして一瞬令子の所定の位置に座ろうとするが、そこではなく座卓から少々離れたところに座る。

光 はあ・・・（歩美に）遅くなって、ごめんなさい。

歩美 いいけど・・・光ちゃん、それで行くのお？

光 え。

晶 服装。変だよ。

光 え、え？——あ！（立ち上がり）ご、ごめん、急いで着替えてくるから。

光、ドタドタと着替えに自分の部屋へ戻る。

歩美 焦り過ぎね。

晶 うん。

歩美 ・・・・フフ、そそっかしいところは子供の頃から変わらないわねえ。

晶 そうなの？

歩美 うん。昔、あ、うちの子が生まれる前はあ、んー、光ちゃんが小学校二年くらいまでかな。運動会にいつも行ってたのね。

晶 え、そうなんだ。

歩美 そうよお。覚えてないと思うけど、晶ちゃんと蓮司君の保育園とかの運動会も行ってたのよお。

晶 そーなんだ。全然覚えてない。

歩美 そりゃそうよお。晶ちゃんこーんなに、ちいさかったもん。

晶 （サイズ感を見て）それ胎児位じゃない？

歩美 （蓮司に）蓮司君は幼稚園まで行ってたわあ。覚えてる？

蓮司 （顔を上げて）・・・なんとなく。

歩美 そう！嬉しいわあ。

蓮司 ・・・（首を下げる）

晶 それで、ひかねえが？

歩美 え？

晶 ひかねえのそっかしい話。

歩美 え、ああそうそう。もー、フフ、私もそっかしいから。ウフフ——あのね、光ちゃん、赤白帽の、ゴム、飛ばないようにしてあるじゃない？

晶 ああ、首のとこの。

歩美 そうそう。光ちゃん、あれが首の所にあるのが、なんか嫌らしくて、しょっちゅう外してたのね。

晶 ゴムを？

歩美 ん、じゃなくて、帽子、被ってなかったのね。

晶 そっちね。

歩美 でね。運動会の時、自分の出番が来るまでは、帽子外してたんだけど。いざ出番が来るたびに、帽子、被らないまま出てきてね。

晶 あー、しそー。

歩美 その度に担任の先生から怒られてね。何回目だったか忘れたけれど、あまりに多いから、あの、「紅組がんばれ」みたいなアナウンスあったでしょう。

晶 うん、あったあった。

歩美 あのアナウンスに「相羽さん。帽子を被りましょう」って言われて。

晶 えー、ハハ。

歩美 で、あ、思い出した。その時50M走だったんだけど、よいドンで光ちゃん、帽子を置いてたところに走り出してね。もう、みんな、大笑い。

晶 えー、アハハハ。

歩美 もー、笑い事じゃないわよ。すっごく恥ずかしかったのよお。

令子 （廊下を通過中ストップして） あれは笑ったわね。

蓮司 ……（無言でうなずく）

歩美 もー、令子ちゃんも笑ってて。「あなた母親なんだから笑ってないのお」って注意しても笑ってるんだから、ねえ。

令子、すでに移動していてそこにいない。

歩美 あれ、令子ちゃん。

晶 なるほど、すでにその頃から出来上がってたのか。

歩美 さっきの顔と、赤白帽取りに走ってた時の顔が一緒だったわよお。

晶 （目をつぶり）なるほど、想像できる。

晶と歩美、顔を見合わせ笑う。と、そこに用意が出来た光がハアハア言いながら現れる。

光 お待たせ、しましたあ。

歩美 あら、フフ、お帰りなさい。

晶 お帰りー。

光 え、あ、え、フフ、た、ただいま。

晶と歩美、また笑う。光、状況が飲み込めず先程一瞬だけ座った位置に座る。

光 ん？フフ、ん、うん？フフフ……

晶 用意、済んだ？

光 え、うん。



晶 忘れ物、なあい？

光 え、うん・・・(カバンを漁り) うん、大丈夫。多分。

晶 そう。

光 うん。

と、そこにダラダラと令子が入ってくる。いささか蓮司よりも軽装に見える。

令子 (あくびしながら) お待たへ。

歩美 もー、約束忘れてた人が一番遅いってどうゆうことお？

令子 (自分の所定の位置に座り) ごめんって。

歩美 なに座ってるのよ。もう行くわよお。

令子 えー、用意に疲れたから、ちよつと休ませてよお。

歩美 (立ち上がり) 何言ってるの。一時間遅れてキャンプ場の人カンカンなのよお。

晶 やっぱ大丈夫じゃなかった。

令子 でも、一時間伸びたんなら・・・(時計を見て) あと30分くらい余裕あるんじゃない？逆に。

令子、「逆に」の言い方に癖がある。

歩美 ・・・・何の逆よ。それじゃギリギリになるでしょお。

令子 いーじゃん、ギリギリで。

歩美 良くないでしょお。令子ちゃんのそういう所が嫌で、あの人出て行ったんじゃないのお。

相羽姉弟、一瞬緊張が走るが。令子はノーダメージ&ノータイムで即座に応える。

令子 アハハ、そうかもね。

歩美 何笑ってるのよお。笑うところ、それ。

令子 えー、面白かったら笑うでしょお。(光に) ねええ。

光 ——— え？あ、え、フフ、うん・・・(歩美に引きつった笑顔で) うん。

歩美 もー、なあに、光ちゃんまで。あなたもそういう所、あの人にそっくり。

光 ……

令子 あー、確かに。ハハハ、似てる似てる。日和見主義？ハハハ。

歩美 もー、いいわあ。じゃ、私、車出してくるから。玄関の前で待っててね。(晶に) お願いね。

晶 はーい。

歩美、自身のカバンを持って出ていく。3人、ノータイトで同時に自身の所定の場所に移動して座る。令子、出ていく様を見て嬉し気に口を開く。

令子 (笑いながら) いやー、酷いこと言うねえ。

晶 さすがに怒ると思った。

令子 えー、私があの子に？ないない。

晶 そうなんだ。

令子 にしても(光を見て)確かに、そーいうところ、似てるかもねえ。

光 え・・・そ、かな。

令子 (満面の笑みで) うん。

光 ……そう。

令子 うん、あんたとお・・・(蓮司) あんたも。

蓮司 ……え。

令子 二人の似てるとこは違うけどねえ。それぞれが、それぞれに。あ、蓮司は顔も似てるから、ポイント二つね。ツーポイント、ゲットオ！

令子、親指をぐっと突き上げる。蓮司は何の反応も出来ないままだいる。一瞬、光の口角が上がる。

晶 もー、こんな話してないで玄関出ようよお。歩美ちゃん、また怒るよ。

光と蓮司、その言葉に妙に焦り立ち上がる。

令子 ———— って言いながら、あんたも立ってないじゃん。

晶 …… まあ、私もギリギリでいいかもって思ってた。

令子 アハハ、そーゆーとこ、私にそっくりねえ。

光と蓮司、一瞬固まる。と、外からクラクションの鳴る音が聞こえる。

晶 (立ち上がり) あ、やばいやばい。

令子 (同じく立ち上がり) 急げ急げー。

4人、自身の荷物を持って玄関を出ていく。と、鍵をかける音が聞こえ、その後車が発進する音が聞こえる。しばし、静寂。やがて、車の止まる音とガチャガチャと鍵を開ける音が聞こえ、慌てた光が入ってくる。

光 スマホ・・・スマホ・・・えー、どこお・・・

光、あちこち探しながらやがてピタッと止まり、台所へ行く。と、スマホを片手に現れて廊下で一瞬立ち止まり、深いため息をつく。

光　　また嫌味言われる・・・（誰にも聞こえない声で）クサクサするなあ・・・くさくさくさくさ・・・

光、ぶつぶつと呟いている、と、またクラクション音が響き、光、ハツとして今を出ていく。と、相羽家の居間だった空間が、光の職場へと変わる。

# 11. 十一月

光の職場。まだ始業前で誰もいない。と、やがて早川が入ってくる。荷物を置き、自身のPCを起動し、その間、部屋を出て行く。と、やがてカップにお茶とコーヒーを淹れて戻ってくる。コーヒーを光の席に、お茶を自身の席に置くと、軽く体操する感じで身体を伸ばし始める。と、そこに光が現れる。

光　　（少し恐る恐る入ってくる感じで）・・・おはよう、ございます——あ、おはようございます。

早川　　——（伸びを止め）あ、相羽さん、おはようございます。

光　　早川さん、お早いですね。

早川　　うん。

早川、体操を終えて自身の席へ着く。光、早川の様子を伺いながら自身の席へ着くと、コーヒーが淹れてあることに気付く。

光　　え、あ、コーヒー、早川さんですか？

早川　　うん——あ、濃かったらごめんね。

光　いえ、その、ありがとうございます。  
早川　いえいえ。

早川、お茶を一口啜り、PCをいじる。光も、様子を伺いつつコーヒーをすする。

早川　（呟くように）返事は、まだ来てないか。

光　・・・あの、早川さん。

早川　（メールをチェックしながら）んー、なあに？

光　今日はどうしてお早いんですか？

早川　んー、ちょっと早く来ようと思って。

光　・・・なるほど。

早川　・・・フフ、相羽さんいつもの位早く来てるのかなあと思って。

光　え。

早川　いつも早く来て、私たちのお茶まで淹れてくれてるでしょ。

光　あ、はい。

早川　今日たまたま早く目が覚めちゃったから、一本早い電車に乗って来たの。で、いつものお返しにコーヒー、淹れておこうと思って。

光　・・・そうなんですネ。ありがとうございます。

早川　こちらこそいつもありがとうございます。

光、間仕切りの向こうで照れつつ恐縮しつつで忙しそうにしている。

早川　（軽くあくびをして）フフ、早く起きた時は二度寝してるから、今日はちょっと眠たいな。  
光　え、それは・・・な、なんか、すいません。

早川 フフ、なんで謝るの。

光 なんか、かえって申し訳ないことしてる？みたいな――

早川 アハハ、なんでよ。(間仕切りから顔を出し) いつも、ありがとうね。

光 (釣られて立ち上がり) え、あ、その・・・きよ、恐縮です。

早川 アハハ、固いなあ。

早川、そう言う座って、またメールのチェックを始める。光、早川を見つつ座ろうとする際に松下のデスクが気になる。

光 ……あ、松下さんのお茶・・・

早川 え、ああ。フフ、私、松下さんにお茶淹れてもらったことないから。相羽さんのだけよ、用意したの。

光 あ、そーなんですネ。じゃ・・・

光、お茶を淹れに出て行こうとする。

早川 いいんじゃない？たまには用意しなくても。

光 ―――え、でも――

早川 いじわるじゃないのよ。多分、あの子、何も気にしないで自分で用意するわよ。

光 え、そうなんですか。

早川 多分ね――おはよう松下さん。

光 え。

光、振り返ると、丁度松下が入ってくる。

松下 おはようございます。

早川 おはよう。

光 おはようございます。

松下 (早川に) 今日、早かったですか？

早川 え？

松下 出社したの。

早川 うん、そうなの。

松下 やっぱり。

早川 どうしてわかったの。

松下 (ニヤッと笑って) 雰囲気です。

早川 (少し笑って)。雰囲気。

早川もニコッと笑って座る。松下も荷物を置いて座り、PCを起ち上げる。光はお茶を淹れてこようかどうか、わちゃわちゃしている。

早川 (松下に) 早く来たからねー。いつもお茶を淹れてくれる相羽さんにコーヒー淹れてあげたの。

光 (声に鳴らない声で) え？

松下 そうなんですネ。

早川 相羽さん、コーヒー苦くない？

光 え、あ、お、美味しいです。

早川 そ、良かった。

松下 早起きは三文の得ですね。

早川 ん・・・ちよっと違うくない？

松下 全然違いますね。

早川と松下笑い合う。光は二人がなんで笑っているのかわからないでいる。

松下 じゃ、お茶淹れてきます。

光 (声に鳴らない声で) あ。

早川 はーい。

松下、部屋を出て行く。光、松下を見送ると立ち上がり早川を見る。

早川 ……ね。

光 はい。

早川 でしょ。

光 おっしゃる通りでした——なんで、わかったんですか。

早川 え——彼女、人に何かしてもらったのを「当たり前」って思う子じゃないからかな。

光 当たり前。

早川 逆に私は、油断すると当たり前前って思ってしまう所があるから。んー、だから今日はそんな自分をリセットしたかったのかも。

光 り、せつと、ですか。

早川 ごめん、わかりにくい話よね。

光 え、いや、その、勉強になります。ふ、深い、ですね。

早川 え……フフ。

光 は、ハハハ。



二人、軸が絶妙に違ってる笑いで笑い合う。と、そこに松下がお茶を淹れて現れる。

松下 （お茶を置きながら）なんか、朝から楽しそうですね。

光 あ、はい。

早川 三文の得かしらね。

松下 ですか。

三人、思い思いに笑い合う。と、早川、時計を見て口を開く。

早川 —— あ、始業時間。じゃ、お仕事始めますか。

松下 はい。

光 はい。

三人、めいめいの仕事を始める。やがて早川、松下に声をかける。

早川 松下さん、山陽工業って会社からメール来てない？

松下 え、私ですか。ちょっと待ってください—— んー、来てないですね。

早川 そう。

松下 どうしたんですか。

早川 んー、今週中に見積もりが上がってくるはずなんだけど……やっぱりまだ来てないなあ。

松下 そうなんですか。

早川 あ、もしかしたら第一に行ってるかも。

松下 あ、たまーにあるやつですね。

早川 うん、もしかしたらそうかも。ちょっと行ってきます。  
松下 はい、お氣をつけて。  
早川 (立ち上がり) フフ、何を氣をつけるのよ。  
松下 行つてらっしゃい。  
光 ——— え、あ、行つてらっしゃい。

光、これまでの話を全く聞いておらず、松下の「行つてらっしゃい」の音だけに反応する。早川、部屋を出て行く。

光 (早川を見送り) どこ、行かれたんですか？  
松下 あ、聞いてなかった？ 第一にメールの確認。  
光 え？ あ、メールの確認？ なんて？  
松下 たまにうち宛のメールを間違つて第一宛に送る人いるでしょ？  
光 え、ああ、なるほど。 ありますね。  
松下 その確認。  
光 なるほど。  
松下 山陽工業って会社からだって。  
光 なるほど。

二人、しばし仕事を続けるが、ふと、光の動きがピタッと止まる。

光 …… 山陽工業 …… 山陽工業。  
松下 (タイプしながら) んー、何？  
光 いや、山陽工業って、なんか聞いた氣がして……

松下 え。

松下、タイプする手を止めて、間仕切りから顔を出す。

松下 思い出せる？

光 うーん・・・どうでしょう・・・

なんか、やっちゃった、かも。

松下 かも？

光 あ、本当に「かも」です。

松下 本当に。

光 「身に覚えはないんだけど、もしかしたら私？」位の、「かも」です。

松下 ・・・・そう。

光 そうです。

松下 じゃ・・・大丈夫？

光 はい・・・多分。

松下 多分——

光 （戻って来た早川に）——あ。

松下 え、あ、どうでした？

早川 んー、来てないって。

松下 そうですか。

光、勝手に不安が募っていく。

光　　・．．も、もしかしたら、私ですかねえ。  
松下　え。  
早川　え？  
松下　え、違うんでしょ。  
早川　え、どうしたの？  
松下　いや、違うんですよ。  
早川　なにが？  
光　　もしかしたら、何かやっちゃったかも、と思って。  
早川　え？  
松下　いや、違うと思いますよ。  
早川　え、だから何が。  
光　　私、山陽工業って聞き覚えがあつて——  
早川　え？  
松下　聞き覚えがあるだけだと思います。  
早川　そうなの？  
光　　わかりません。  
早川　え、どっち。  
光　　どっち——どっち？  
早川　聞き覚えがあるのか、聞き覚えがないのか。  
光　　どっ——ちでしょう。  
早川　ええ？  
松下　あるだろうけど、仕事の話じゃないと思います。  
早川　そうなの？

光　　わかりませ——あ!!

光、めちやくちや大きい声を出す。フリーズする松下と早川。

松下　・・・え。

早川　相羽さん？

光　・・・私、この間、あの、文化の日に図書館に行ったんですよ。その、妹が、なんか、資格を取るそうによく通ってるんです。  
早川　うん。

松下　それで？

光　で、その文化の日に、あ、私も妹も仕事休みだったから、一緒に、図書館に行ったんですね。

早川　うん。

松下　それで？

光　で、その図書館、私が子供の頃からある近所の、割と小さい図書館なんですけど、そこで、なんかよくわからない像をあげる・・・  
何て言うんですかね。

松下　贈呈式？

光　そう！それをやってて。

早川　うん。

松下　それで？

光　で、その、よくわかんない像を・・・寄贈？  
松下　うん。

光　寄贈、してたのが、山陽工業でした。  
松下　え。

早川　山陽工業？

光　です。社長さんって言っていました。文化の日だから、寄贈したって。

早川　・・・そう

松下　・・・で？

光　え？

3人、しばし沈黙する。

光　え、だから、私が、その、山陽工業って聞いたことあるなあって——あ、あ、違う、見た、話ですね。ハハ・・・

早川　・・・（松下を見て）ハハ。

松下　（呼応するように）ハハ。

3人、乾いた笑いをする。

早川　（松下に）——あ、じゃあ、私、先方に電話して直接聞いてみるね。あ、ついでに総務課に行ってくる。

松下　そうですか——あ、早川さん、お茶冷めてると思うんで、替えておきますね。

早川　え、あ、ありがとう。

二人、サーっといなくなる。光、所在無きよろきよろしている。

光　やらかしてないのにやらかした感じになった・・・クサクサする——（誰にも聞こえない声だが呟きより大きい声で）クサクサする・・・くさくさくさくさ・・・

と、空間が光の会社から相羽家へと変わっていく。

相羽家の居間。令子と何故か芝乃が歓談している。

令子 ……え、いつだっけ。

芝乃 あの、あの時です。光が靴紐がどうしても左の方だけ縦結びになるって泣いてた時。

令子 え——あー、あの時ね。はいはい。

芝乃 その日からですね。

令子 あー、思い出した。いや、なんでそんな事で泣くんだったってことの方が印象強かったから——あー、あの時あの子の隣で慰めてたのが芝乃ちゃんだったのかあ。

芝乃 そうなんです。

令子 あの子がうちに珍しく友達連れて来るって言うから、どんな子だろうって思ってたら、こんなかわいい子でしょ。

芝乃 (照れてる体で) いやー。

令子 その日からずっと一緒に遊んでたから、そこからの付き合いだと思ってた。

芝乃 私は、ちゃんと覚えてましたよ。初めて令子さん見た時に「わーっ、光ちゃんのお母さんきれー」って思って。

令子 フフ、おばさん褒めても何も出ないよ。あっても出さないけど。

芝乃 ウフフ。

令子 にしても、今日に限って遅いね、あの子。どこほつつき歩いてるんだろう。

芝乃 いえ、本当に。お土産渡そうと思ってただけなので。じゃあ、これ光に。

と、芝乃、小さな包みを渡す。

令子 はい、どうもありがと。

芝乃　で、これは皆さんでどうぞ。

芝乃、今度は大きな包み紙を渡す。

令子　ふふーん。目に入ってたあ。

芝乃　気づいちゃってました？

令子　ありがたく頂戴します。

芝乃　（立ち上がり）じゃ、私はこれで。

令子　はーい、何のお構いもなく。

芝乃　いえいえ。では、良いお年を。

令子　はいはい、良いお年を。

芝乃、そのまま出て行き、令子は見送りをせず座ったままである。と、芝乃の「おじゃましましたー」の声と、歩美の「おじゃまします」の声がシンクロする。嬉し気にお土産を開けようとしていた令子。けだるそうに芝乃と歩美のわちゃわちゃした会話を聞いている。やがて歩美が入ってくる。

歩美　おじゃましますー——あれ、今日は一人？

令子　（リモコンでテレビのチャンネルを替えながら）見ての通り。

歩美　（荷物を置きながら）そう。

令子　——あ、蓮司は居るな。かわいこちゃんがうちに入ってきたから自分の部屋に逃げてった。

歩美　え、ああ、さっきの子。なにちゃんだっけ？光ちゃんのお友達。

令子　なんか家族旅行に行ったとかでお土産くれた。

歩美　そうなの。あ、私もお土産あるわよお。



令子　はー、お金のあるお方々は羨ましいですなあ。

歩美　（お土産を広げながら）何言ってるの。町内会の婦人会で行ったのよ。ちゃんとし積み立てしてるんだから。

令子　その、積み立てする金もないんですなあ。

歩美　はい、熱海土産。

令子　おー、ザ・温泉まんじゅうって感じだね。

歩美　これ今人気なのよお。行列並んで買ったんだから。

令子　どうもありがとうございます。

令子、歩美に身体を向けてバカ丁寧にお辞儀をする。

歩美　うむ、くるしゅうない。

歩美、歌舞伎の見栄を切る様に言うが、令子はその頃時すでにテレビの方を向いている。歩美、軽く肩透かしを食うが気にせず話を始める。

歩美　熱海、良かったわよお。

令子　そうなの。

歩美　なんか、ベタってイメージあるでしょお。でも、そのベタな感じが良いつていうか。はまるつていうか。

令子　おばちゃんだもんね。そらはまるでしょ。

歩美　ちよつとお、それなら令子ちゃんの方がおばさんだからね。

令子　そらそうだよ。３人大人の子持ちのおばさんよ。アンチ・エイジング？ゴー・アウェーイ。

令子、「あっち行け」の手の動きをする。歩美は周りをキョロキョロしながら何やら二つ折りの台紙を取り出す。

歩美　でね、今日は令子ちゃんに良いお話を持って来たんだけど。

令子　はい？——なにこれ。

歩美　（台紙を広げ）ね、どう、この人。

令子　どうって・・・はあ・・・どうとも。

歩美　えー、素敵じゃない？こう見えてこの人、令子ちゃんと同じ歳なのよ。

令子　（受け取り）ほうほう。若作りしてんね。

歩美　でしょー、良くない？

令子　アンチ・エイジング・ゴー・トゥ・ヘル。

令子、　　そう言う台紙をフリスビーのように廊下へぶん投げる。

歩美　あー、ちょっとお、何すんのよお。

歩美、　　慌てて取りに行く。それを見て令子、カラカラと笑う。歩美、ブツブツ言いながら戻ってくる。

歩美　もー、こっちは真剣に考えてるのに。

令子　それはどーも、ありがとーございます。

歩美　（座って）・・・ねえ。もう次の人に行ってもいいんじゃない？

令子　（テレビに向いて）次。

歩美　女手一つで3人とも立派に育て上げたんでしょ。これからは自分のために生きてもいいんじゃない？

令子　歩美もあれこれ手伝ってくれたでしょ。別に私の力で、だけなんて思っていないわよ。

歩美　でも、私のはただのおせっかいだから、一緒じゃないでしょ。

令子　お、わかってんじゃん。

歩美　もー、令子ちゃん。  
令子　はいはい。

歩美、一つ深呼吸をして話し始める。

歩美　まだ、あの人のこと好きなの？

令子　ハハ。そんなわけないでしょ。

歩美　だって、籍もそのままなんですよ。

令子　だって、籍外したらあっち結婚するじゃん。

歩美　何それ、復讐のつもり？

令子　え・・・なるほど。そういう考えもあるか。

歩美　なるほどって――

令子　あいつが結婚したら、あの子たちにお父さんいなくなるでしょ。

歩美　・・・

令子　それに、名前も、相羽じゃなくなっちゃうし。

歩美　・・・

令子　お金も無い家だけどさ。あの子たちに思い入れなんてなんもないけど。なんか、みじめな思いだけは、させたくなかったんだよね。

歩美　・・・

令子　うちにいい歳こいたやつらがずっと住んでようが、出て行こうが、仕事まじめに勤めようが、仕事クビになろうが知ったこっちゃないけどさ。ほんつとに、どーでもいいけどさ。・・・自分が、腹、痛めて、今はだれ一人かわいいなんて思ってたけども。あの子たち小さかった時、3人ともみーんな可愛かったのよ・・・その記憶は無くならないからね。で、離婚したら、その、まだどうにか父親をやった――っていうか、父親の原型とどめてた、あいつが。「小さかった頃の3人にお父さんがいた」っていう事だけは、残しておきたいだけ。sonだけ。

歩美  
・・・

令子、苛立つようにテレビのチャンネルを適当に変えまわり、適当なところで止める。

令子  
・・・

歩美  
・・・令子ちゃん。

令子  
なに。

歩美  
離婚しても、姓は残せるよ。

令子  
・・・

歩美  
・・・

令子  
——え、うそ？

歩美  
届け出したら、大丈夫。

令子  
そうなんだ。

2人、  
気まずく、沈黙している。

歩美  
（立ち上がり）まあ、令子ちゃんの気持ちは・・・わかったような気もする。

令子  
そ。

歩美  
でも、離婚しなくても、パートナーを作ったりしてもいいと思うの。なに？セカンドパートナーとかいうの？どうかしら。

令子  
・・・

令子、  
ハアとため息をつき、立ち上がる。そしてそのまま歩美を追いつき出しかかる。

歩美 え、ちょっと令子ちゃん。

令子 (押しながら息継ぎせず) お土産ありがとうございます。若作り男の写真も眼福でした。ありがたいお話いつもありがとうございます。それじゃまた次旅行にでも行ったらお土産をよろしくよろしくお願いいたします。はい、よいお年をよいお年を。

歩美、「ちよつと」「令子ちゃん」などと言いながら追い出される。令子、鍵を閉めて追い出しに成功する。その間に蓮司が居間に戻っている。その後、居間に戻って来た令子、蓮司の存在に少し驚く。

令子 ——— おお、いたんだ。

蓮司 (テレビを見ながら)

令子 ……(無言で座る)

蓮司 ……

令子 話、聞いてた？

蓮司 え、何の？

令子 ……歩美との話。

蓮司 え……うん。

令子 本当に？

蓮司 うん。

令子 ほんとの、本当に？

蓮司 え、うん。

令子 立ち聞きしてなかった？

蓮司 してないって。おばさんいるのに、敢えて聞きにこないよ。そう。

蓮司 立ち聞きしてたら、あとでお母さんになんか言われるし。

令子 そうね。

蓮司 ……なんか、聞かれたらまずい話。

令子 そりゃそうよ。だから必死なんですよ。

蓮司 ……そりゃそうか。

令子 あー、聞いてないんなら良かった——それはそうと、芝乃ちゃんかわいくなってたねえ。

蓮司 え、あ、そ、そうかな。

令子 昔からかわいくてえ、意識してた蓮司君はあ、さらに意識してたんじゃない。

蓮司 そ、そんな、こと、ない。

蓮司、座卓から離れたところに逃げ込み、スマホをいじり出す。

令子 ……あー、すっきりした。

令子、そう言いながらテレビを見出す。と、玄関口から鍵を開ける音がガチャガチャ聞こえてきて、その後光と晶の「ただいまー」の声も聞こえる。その後、二人入ってくる。

※光は台所に買い出しに行ったものを持って行く。

2人 ただいまー。

令子 光、どこ行ってたの。芝乃ちゃん来てたわよお。

光 (遠くから) えー、そうなの？

令子 全く、どこで道草食ってきたのよ。お土産預かってるわよ。

晶 だって、お母さんが年越し蕎麦買ってくるの忘れたから、ひかねえ遅くなったんですよ。

令子 え。

晶 私もシャンプー買いにおおづつやに行って、ひかねえに会ったから聞いたの。  
令子 ……そーでした。

蓮司、クスッと笑う。令子、チッと舌打ちをする。光、居間に入ってくる。

光 ———で、何の話。

晶 お母さんが蕎麦買いに行かせたの忘れてたって話。  
光 え？

令子 ———はい、これ芝乃ちゃんから。

光 え、なんだろ、やったあ。

令子 久々に会ったらあの子、前よりかわいくなってたわねえ。

光 え、そうね、そうだね。

令子 そういや、私とあの子が会ったのって、うちじゃなかったんだね。

光 え、そーだっけ？

令子 なんか、あんたが左の靴紐だけ、どーしても縦結びになるからって泣いてたのが最初だったって。  
光 え。

晶 あー、覚えてる。いつもそうだった。

光 え。

蓮司 今でもたまにそうなってるよ。

光 ええ？

令子 そーなの。興味なかったから見てなかったわ——よし、見に行こう。  
光 え、え、っちょ、ちよっと止めて——

3人、ぞろぞろと玄関へ行く。と、間を置いて3人の笑い声が響いてくる。

光

（誰にも聞こえない声で）え、なに、なんなのこれ、最高に、クサクサするー！！——（ギターを持ちながら）はい——っとう訳で、本日最後の曲となります。長いお時間、お付き合い、誠にありがとうございました。『クサクサする』

伴奏に、晶、蓮司に次いで令子がタンバリンを持って登場する。

※また、歌の途中で他の登場人物も現れる。

♪『クサクサする』

クサクサする クサクサする

クサクサするなあ

キャンプでクサ 文化の日でクサ

大みそかクサクサ

絶対何かを忘れてても

自分の仕事を取られても

靴紐必ず縦結びになっても

草が生えても 大草原不可避でも



クサクサしようぜ

1. 2. 3月は

(ムシャムシャムシャムシャ)

4. 5. 6月は

(ギシギシギシギシ)

7. 8. 9月は

(モヤモヤモヤモヤ)

10. 11. 12月は

(クサクサクサクサ)

ムシャギシしても

モヤクサしても

生きていこうぜ

生きて 生きて

生きていこうぜ

センキューー

おわり